

第 1 回 武庫川シンポジウム

議事録

日時 平成 19 年 6 月 17 日(日) 13:30～17:30

場所 アピアホール

○司会（佐々木） 皆様こんにちは。ようこそ武庫川シンポジウムにお越しくださいました。きょうは、流域内の方も、流域の外からいらっしゃった方も大勢いらっしゃいますけれども、武庫川への興味があるからこそきょうこちらへおいでくださったことと思います。梅雨に入りましたけれども、幸いにもいいお天気で、皆さん武庫川を見ながら来てくださったのかなと思っております。

これから映像が流れてまいります。なぜこの映像を流すのかということについて少しお聞きください。

太古の昔から、川、つまり水辺は、あらゆる命の源であり、憩い、潤いを与えてくれる場でもあります。しかし、一たび嵐が来ると災害をもたらし、水害の歴史というものを繰り返してきました。土木、河川工学が進んだ現在においても、地球規模で襲う異常気象が心配される今日です。そのような中で、自然に立ち向かうためには、流域に生活するみんなが日ごろから武庫川を介して親しみ、交流を行い、川づくり、さらにはまちづくりへと進めることによって、災害時にも力を合わせることができます。

武庫川流域委員会では、総合治水による川のつくり方、治め方の提言書という難しいものをつくりました。これまでの川づくりは、川を管理し、整備工事をするためのハードな川づくりのためのものにすぎませんでした。しかし、武庫川流域委員会の提言は、もっと大事な川づくりの部分についても言及しております。流域の子供から大人、あらゆる人が自分たちの川を自分たちの手で、生活の一部として川に親しみを持って連携し、治める手だてです。

きょうのシンポジウムは、そういう武庫川づくりのスタートに向けたもので、まさしく「川がむすぶ人と地域」をテーマに掲げております。といいましても、もう既に武庫川流域には武庫川を愛する多くの種類の活動をするグループがあります。子供たちももう既に武庫川を通して交流を進めております。

これから流します映像は、そのうちの1つとなりますけれども、昨年11月23日に行われました合唱組曲「武庫川 2006 武庫川めぐり水コンサート」の様態です。配付されておりますプログラムの下にもございますように、武庫川女子大学音楽学部の畑儀文教授が率いる武庫川社会音楽研究会が、武庫川流域、上中下流の4つの小学校児童が武庫川を調査研究して創作した詩に曲をつけて合唱組曲をつくり、児童と学生が歌声で交流を試みた「武庫川めぐり水コンサート」です。

当日は、参加した4つの小学校の児童による武庫川の歴史や自然の研究発表、「赤とんぼ」

の合唱も行われました。どうぞごらんになってください。

(映像再演)

170名の子供たちによるかわいい武庫川に対する思いがたくさん込められておりました。この子供たちは、将来にわたって武庫川について興味を持って、いろんなことに貢献していくと私は確信しております。

それでは、これから「川がむすぶ人と地域」というテーマのもとに、シンポジウムを開催いたします。

本日の主催は武庫川流域委員会と兵庫県、司会は私、武庫川流域委員の佐々木礼子が務めさせていただきます。

お手元にいろんな資料がございます。アンケート用紙も入っておりますので、ぜひ帰りには回収箱に投入をお願いいたします。

早速ですが、プログラム1番の基調講演として、武庫川流域内にあります兵庫県立人と自然の博物館名誉館長、丹波の森公苑名誉理事長、京都大学名誉教授でもあり、武庫川の源流のある篠山に生まれ、現在も篠山市にお住まいの河合雅雄さんをお招きいたしました。

河合さんは、少年期に過ごされた篠山の自然との深いおつき合いから始まり、霊長類のご研究から、子供の教育や森林文化に深い関心を持たれ、森林と生物多様性保護の活動を精力的に行われております。また、京都大学霊長類研究所所長、日本モンキーセンター所長を経られて、世界的なサル学の権威でもいらっしゃいます。これらの活動経緯から、これまでに多くの著書も出されております。

ところで、川の源は森林から始まります。武庫川も、篠山あたりの森林に源を発します。これから、武庫川の森林、自然を知り尽くされた先生から、「川を育てる、川に育てられる」と題しまして、貴重なお話をお聞きしたいと思います。

それでは、先生、よろしく願いいたします。

「川を育てる、川に育てられる」

兵庫県立人と自然の博物館名誉館長、京都大学名誉教授

河合 雅雄

河合でございます。今ご紹介にありましたように、私は、武庫川の源流の篠山市に住んでおります。子供のときから、加古川、武庫川には非常に親しんでまいりました。愛知県の犬山市に46年もおったんですが、5年前に篠山へ帰ってまいりました。そのときに多くの人に聞かれた言葉があります。それは、篠山は変わったかということです。浦島太郎が帰ってきたみたいに言われて、変な気持ちだったんですが、非常にうれしいことがありました。それは、今は合併して大きくなって篠山市になっていますけれども、旧篠山町、私の子供のころ、人口五、六千の町でしたけれども、そこの商家町があります。ご存じのように、篠山はお城があつて、武家町が取り巻いていて、商家町がずっとあるわけですが、私が子供のときにあつた店がほとんど残っているんですね。これはとてもうれしいことでした。八百屋さんなんか結構残っているんです。犬山では八百屋さんはとっくになくなって、八百屋は絶滅危惧種です。どこの日本の町も同じですけども、郊外の量販店とバイパスと車の3点セットで、町の商店街がつぶれちゃって、シャッター街になった。その点、篠山はまだちゃんと残っていて、八百屋、呉服屋、荒物屋、それから、刃物屋さんの目立てをやっているところがある。今、目立てと言っても、若い人には全く通じないと思いますが。荒物屋と言っても、もうわかりにくいでしょう。そういうのが全部残ってしまって、非常にうれしかったんですが、一番変わらなかったのは山並みです。ご存じのように、篠山は周りが全部山で、中が盆地で、どこへ行くのでも峠を越えなければ行けないわけです。

変わったのは何かというと、川と道路です。一番ひどいのは川です。無残と言うしかない。ずたずたにされたと思います。私は、戦後からの人間ですが、戦争があつて、国破れて山河ありという言葉がありますけれども、川は本当に変わりましたし、山も荒れました。私が子供のときに入りびたっていた八幡淵とかはもう跡形もありません。川じゃなくて、あれは水路です。大滝とか小滝とか、非常に大きな岩があつて、小さな滝があつたんですけども、今は全くなくなって、コンクリートで固められた。まるで運河であります。こういう点が本当に悔しかった。それと、川がいつも濁っているんですね。戦後50年、60年たつのに、まだ濁っている。必ずどこかを掘っている。

丹波の森構想というのがありまして、これは前の貝原知事が言われたことから始まって

いるんですけれども、合併前は、丹波は多紀郡と氷上郡で10町ありました。その10町、面積にして780平方キロあるんですけれども、これ全体を丹波の森というふうに名づけて、森林文化というものを基調にした21世紀の新しい生活創造をしていこうということなんです。

丹波というのは、3つの川の源流なんですね。加古川と武庫川と日本海へ流れる由良川――これは前の氷上郡ですけれども、その3つの川の源流の里と言ったら、非常にロマンチックな響きがあります。そして、ぱっと浮かべるのは山紫水明という言葉です。ところが、残念ながら、今申したように、川がずっと濁っていて、特に篠山川はひどいです。ヘドロがたまり、魚は臭くて食べられない。そんな状況なんですね。

私は、小学校、中学校と、少年期にかけては川と野山にひたっていたと言ってもいいと思います。特に川は大好きで、春先から出かけていました。私は魚をつかむのが得意なんです。魚つかみに興じて、もちろんとったものは食べるわけですけれども、そういった川の思い出、特に子供時代の体験は心にしみ込んでいた。DNAの中に入り込んだんじゃないかというぐらい深層にひたりに込んでいます。

ですから、今は川が大好きでしてね。時々お話しするんですが、前私は愛知県犬山におりましたから、京都、大阪へ来ることが多かったです。行き来の新幹線はできるだけA席に乗るんです。A席というのは窓側です。窓側はA席とE席とあるんですけれども、E席はだめ。A席にできるだけ乗る。なぜかと言ったら、木曾三川――木曾川と長良川と揖斐川をどうしても見ないと気がおさまらないんですね。あの3つは本当にいい川です。今でも東京へ行くときは、席がとれないときはデッキへ行って見えていますけれども、特に木曾川は本当に立派です。ところが、そこを過ぎると、いわゆる東海道の川、天竜川、大井川、安倍川、富士川、名立たる川ですけれども、あれは川じゃないですよ。もう河原です。河原に小川が流れているというので、何とも情けない、惨めな思いになっています。それは上にダムをつくって、全部水をとったからですね。そういう点は、木曾三川は本当に立派であります。そのくらい川というものが身にしみ込んでいるわけです。

きょうのシンポジウムに私はこのこ出かけてきたわけですが、このシンポジウムの趣旨を拝見しますと、武庫川づくりに欠くことのできない流域連携を生み出すための仕組みと手法を見出したい、そういうことが書いてあります。私は、河川工学というようなことには全く疎いですし、地域連携ということ、コミュニティー問題とか、環境社会学とか、そういうことの専門ではありません。私は、むしろ山、森林のことにずっとかかわってき

たわけです。それで、私は適任じゃありませんとお断りしましたがけれども、松本さんに説得されまして、表題の川を育てる、川に育てられる、こういう話だったら、私は川の大好き人間という点では人後に落ちないつもりなんですね。ですから、そういう点でお話をさせていただくのならばと言って、きょうは参ったわけです。

私は、戦後ずっと自然保護の問題にかかわってきました。今でも、自然を大事にしようとか、森を大事にしようとか、そういう声をいっぱい聞きます。けれども、一番大事なのは、私は、自然を好きになってもらうこと、これが一番だと思うんですね。川の問題も、自然の一部ですけども、とにかく川を好きになってもらうこと、これが一番大事じゃないかと思います。理屈でわかることも1つは必要ですけども、何よりも川が好きになる、川を愛する心を育てる、特に子供のときからそれを育てなきゃいけない。私なんか、もう川から離れられないわけです。子供のときの思い出が入り込み過ぎている。それと、川というのは、人間にとって一体何なのか、そういう基本的な考え方をお話しできたらと思います。

実は、武庫川にダムをつくるという話を聞いたときは、非常にショックを受けました。腹が立ちましたし、がっかりして、またかと思ったんですね。私は、武庫川の溪谷で遊んだことはありませんけれども、武庫川とは非常に関係が深いんです。というのは、武庫川の一番の源流は、真南条川の先の龍蔵寺というお寺の谷があります。ここは子供のときの私の巣なんです。昆虫少年でしたから、捕虫網を持ってずっとそこへ出かけていった。そして、川が好きですから、谷川のカニをとったり、いろいろなものをとっていました。そこで、非常に不思議な魚を見つけたんです。小学校の5年のときでした。びっくりしました。アカザというのがおりますよね。このごろ減って、余りいなくなりましたけれども、ナマズのこどもとドジョウのあいこのみみたいな小っちゃいやつで、ひげがぴっと生えていて、しかもひげが4対もあるんですよ。変なやつなんですね。子供のときですから、その新種かもわからんと思って、図鑑を調べたら、ホトケドジョウと書いてありました。ホケトドジョウ、ご存じの方ありますか。本流にはそんなのは全くいませんから、だれに聞いても、ホトケドジョウなんて聞いたことがない。私は、子供のときにとっても得意でした。そういう思いがしみ込んで、今私は何をやっているかということ、実はホトケドジョウに熱中しているんです。

魚の学問はどんどん変わりますから、ホトケドジョウは2つに分類されました。ナガレホトケドジョウとホトケドジョウー本当のホトケドジョウの2つになっています。篠山

にいるやつはナガレホトケなんですね。ホトケドジョウは、兵庫県で3カ所だけいることがわかった。それは丹波市の本当に変なところですよ。湧き水のところしかありません。まずはそれを保護しなきゃと思って、仲間といろいろやっているんですけども、それを発見したのが、龍蔵寺の一番奥です。武庫川は、よく調べられていると思うけれども、あの源流の奥が昔はどうだったかを知っている生き証人はもう私ぐらいかもしれませぬね。子供のときは好奇心が強いですから、川の一番先はどうなっているんだろうと歩いていきました。あれを越えたら母子の大池へ行きますけれども、川が小そうになっていって、あとは、水がなくなって、石ころになります。それから、今は全くありませんけれども、アヤメの群落がありました。オミナエシの群落がありましたね。あれを発見したときは、子供心に天国の花園に行ったような感じです。今残念ながらどっちも全くありませんけれども。そんなことで、源流にとっても親しんだ。

もう1つは、溪谷ですね。福知山線が複線になる前は、あそこを通っていたわけでしょう。今は散策道になっていますね。そここのところの谷が物すごいきれいでしょ。汽車の窓から、もちろんSL時代から、あそこを通るたびにあの谷を見て感嘆していました。ああいう谷がなくなるというのは非常にショックなわけですよ。今は福知山線は味気なくなりました。複線化して、トンネル、トンネル、トンネルですよ。名塩なんて、前になかった駅ができましたし、とにかくトンネルばかりで、谷がちょこちょこっと見えるだけ。そのかわり、前は大阪、篠山口というのは2時間10分かかったんですが、今1時間で行きます。時間が半分になった。便利になったというのはすごくいいんですけども、我々の子供時代に熱中した美的感動というものが便利さの中に全部消えてしまった。文明というのはこういうものだなというふうな感じがいたします。

ともかく、武庫川の溪谷というのは、私は、兵庫県でも有数の溪谷美を持った非常にすぐれた溪谷だと思うんですね。これはだれがつくったかといったら、もちろん人間がつくったわけではなくて、何十万年とか何百万年という非常に長い自然の歴史、あるいは日本列島の歴史がつくっていったわけですよ。森林というのは再生できます。一回焼き払って、100年、200年たったら森はできていきますよね。ところが、ああいう峡谷は一遍つぶせばなくなる。もう再生できない。再生不可能であります。

ですから、これは私の個人的な感想ですけども、ああいう本当の溪谷美は自然が我々に与えてくれた一つの立派な財産です。これをつぶしてしまうというのは、後世の人からそれを奪うことで、歴史的な犯罪行為じゃないか。そんな感じさえするわけです。それと、

私は川が好きですから、かねがね日本の水行政というものに対して不信感を持っておりました。つまり、戦後は、治水、利水—これは大事なことで反対する理由は全くありません。ただ、この錦の御旗のためには何をしてもいいというふうになっていったと思うんですね。そして、日本じゅうの川の自然を破壊したというふうに私は思います。

川とは一体何だろうかといったら、第1には、自然がつくった造形物だということです。それこそ何百万年とか、場合によっては何千万年という長い地球の歴史が、川の形も、うねり方も、流れ方も、みんなつくっていったわけです。川には、ご存じのように平瀬があり、早瀬があり、よどみもある。石のところもあり、粘土のところもあり、川底も、砂地があつたり、泥があつたり、石ころがあつたり、それぞれ個性的な姿を持っています。それから、河原というのがありますね。私はこれはびっくりしたんですけれども、河川学者に聞きますと、ヨーロッパの人を連れてきたら、その人が一番感心したのは河原だということです。ヨーロッパの川には河原がないというんですね。我々は、川といえば、河原があるのは当たり前と思っているわけでしょう。そんなものは全くない。河原というのは、日本の川を特徴づける非常にユニークな景観なんですね。それから、河畔林があり、多くは竹やぶもありました。自然がつくった一つの造形物だということです。

2番目は、その中にはさまざまな生き物、魚は当然ですけれども、水生昆虫とか、水鳥とか、そういうものがいっぱいすんでいる場だということです。3番目は、人間の文化をはぐくんできた、それによってできた文化的な空間なんだと。文化的な水空間、これが川であります。4番目は、子供の一番の遊び場だった。そして、子供を育てた教育の場だったというふうに思います。残念ながら、日本の河川行政というのは、今言った4つのことにほとんど配慮がなかった。これはとても残念なことであります。

というのは、治水ということ、これは非常に大事で、特に日本では非常に大事なことです。明治以後、治水の技術というのは、初めはオランダから輸入されたそうですけれども、とにかく自然を征服して支配するというのが治水の根本です。これは、さかのぼればヨーロッパの自然観、キリスト教並びにキリスト教文化の自然観というものに基づいているわけですけれども、このことは詳しく申しませんが、そういう一つの思想的な背景とそこに自然科学と技術というものが乗っかって、完全に自然を支配し利用していくという思想で、治水が行われていった。そのあげくに、川を全部殺してしまったというのが現状じゃないかと思います。

残念ながら、ほとんどコンクリート漬けですよ。悪名高い三面張り工法が行われまし

た。私は篠山へ帰って、ごそごそするのが好きですから、ホトケドジョウを探そうと思ったら、変な谷川の奥の湧き水のところにおるんですが、そういうところへ行っても、どうしてこんなところをコンクリートで固めてあるんだらうと。こんな溝でも全部コンクリートで固めてありますよ。本当に不思議ですね。マニアックとしか言いようがないような行為が見られます。ここまで駆り立てたのは一体何だらうかということを考えざるを得ません。

これは、1つは、治水に関する基本的な考え方です。とにかく、人為的に水を制御して、全部河道へ流して、河道から外へは一滴もあふれさせない。そういう幻想があったと思います。もう1つは、よく言われるように、政官財の癒着の構造の中での利権を生み出す装置になっていたということも非常に大きいだらうと思います。そのあげく、全く川は死んでしまいました。もうメダカもすまない、コブナもいない、ゲンゴロウもいない、そういうような小川ができた。それから、子供の遊び場が全部奪われてしまったということは非常に大きな問題であります。川ではなくて、水路づくりに熱中してきたということだと思います。

先ほど言ったように、水を河道にすべて封じ込めて制御していくというのは不可能なんですね。不可能なことをやろうとしたのが、私は不思議でなりません。私なんか、全く常識でしか判断できない者ですが、常識で考えたら、日本というのは、都市とか農地とかのところは全部沖積平原にできているわけでしょう。沖積平原というのは氾濫原なんです。特に日本の川というのは、流れが非常にきつい。そこへ持ってきて、集中豪雨がある。それから、台風がある。集中豪雨だって、1時間に100ミリ以上の雨が降る。こんなのは防ぐことができないわけです。川があふれたら、氾濫原になる。これは日本というものの自然が持っている運命なんです。それを人間がコントロールしようなんて思ったのが大間違いであります。

そこで、ようやく総合治水という考えが出てまいりました。ご存じのように新河川法というのができまして、これは平成9年ですが、非常に画期的なことであります。今までの治水、利水、これは当然大事ですけれども、環境を大事にする。環境に配慮する。それから、住民の参加によって考えていこう。こういうことが行われてきたわけです。その結果、本県では、武庫川の委員会ができて、1,000時間ですかーの討論をなさって、非常に立派な報告書をつくられております。専門的なことは私はわかりません。流量が幾らやとか何とか言われてもわかりませんが、大変画期的なすぐれたものだなというふうに思

います。

川について、私は、2つのことを特に取り上げたいと思います。1つは、川の文化を復活したい。2つ目は、子供の遊び場としての川を確保したい。このことを特にこれからやっていきたいと思うんです。

文化という考え方は、日本人は、芸術とか科学とかに文化を感じがちですが、いわゆる生活文化というものにおろしますと、我々は箸でご飯を食べる。これも一つの食文化なんですね。お米を主食にしている。これも食文化なんです。出会ったら、おじぎをする。こういうあいさつの仕方も文化なんです。文化というのは、非常に広く考える必要があるんですが、川に関してこういうおもしろいエピソードを聞いたことがあります。

もう亡くなりましたけれども、遠藤周作さんという、狐狸庵と称するおもしろい小説家がいきましたよね。時々あの人と話をしたことがあるんですけれども、彼が前の佐藤栄作総理とインタビューしたことがあった。佐藤さんは張り切って、文化を大事にしたいと言い出したわけですね。これはとてもいいことです。それで、遠藤さんが、手始めに隅田川の泥を揚げて、セーヌ川のようなきれいな川にしたらどうですか、みんな川にもっと親しんだらどうでしょうと言ったら、佐藤栄作さんはむっとして、「君、僕が言っているのは文化だよ。文士なら、文化という言葉がわかるだろう」と怒ったというんです。川をきれいにするというのは文化じゃないと思っているんですね。そういう人が文化を大事にしようと言い出すのは、いいことなんでしょうけれども、まだそんな程度だった。そういうことに比べれば、今は随分一般的な知識も政治家の知識も上がったと思います。

私は、川の文化というものを一番発展させたのは日本国民じゃないかと思います。昔から、例えば、隅田川は江戸という町を支えていく上には非常に大きな役割をしました。広重の絵でも隅田川を描いたものが非常に多い。あそこで人々は本当に楽しんだわけです。初めて桜を植えて、桜土手もつくりました。舟遊びもしました。隅田川文化というものを非常に発展させたわけです。それから、京都の鴨川とか、大阪の淀川とか、もちろん水運、交通の便に使うと同時に、いろんな遊びの文化をそこに広げていったというのが日本の川の文化だったと思います。にもかかわらず、私は悔しい思いをしています。なぜかと言ったら、例えば、パリと言ったら、皆さんセーヌ川と思い出すじゃないですか。ロンドンと言ったら、テムズ川、ニューヨーク、ハドソン川、ウイーン、ドナウ川とくるでしょう。ところが、世界じゅうの人でも、日本の人でも、東京、隅田川なんて、だれも言わないんじゃないですか。このぐらい川の文化が今軽視されているんですね。これは私はとても悔

しいと思うんです。それを復活したいと思います。

私は、今森のことをやっていますから、森遊びを進めて、森林文化ということを一生涯懸命言っています。森林文化というのは、だれもわかってくれません。私は、川遊びといたら説明の必要がないでしょうと言うんです。日本人は、川遊びといたら大体内容がわかるわけです。ところが、欧米では、ちょっと前までは、川の文化は非常に低調で、森の文化ばかりが発達してきたわけです。森林文化は、欧米では非常に発達しています。森遊びが非常に盛んです。ところが、日本では、逆に森林文化というものは非常に低調で、森遊びの文化がありません。ですから、森遊びを川遊びと同じようにやりましょうと言うんですけれども、残念ながら現実には今川遊びが廃れている。それで、私は、子供の遊び場というものに川をできるだけ使っていきたいと思います。

我々のころ、ちょっと前までは、学校にももちろんプールなんかなくて、夏は学校が終わったらみんな川へ行って遊んだものです。あれほど楽しい場所はありません。ところが、川は危険だ、子供を川で遊ばすなど。極端な例もありましたね。私の友人で写真を撮っている人がおりますが、「いい子は川で遊ばない」という立て札を立てているんですね。あんなばかげたことを本気になって考えた時代もあるわけです。今はそこまでやりませんけれども。

川で遊ばさないというのは、理由は幾つかあります。1つは、川が汚れています。泳げる川、魚がいっぱいいる川、その魚を食べられる川は少ないですよ。例えば、篠山川、だめですよ。武庫川の上流の方がまだいいでしょうね。加古川はだめです。もう1つは、子供を安全に安心して育てようという思想がちょっと強過ぎますね。それから、今の教育の1つの問題点だと思いますが、子供をできるだけ安全にと言うんだけど、そのために子供から危険をできるだけ遠ざけよう、遠ざけようとしたでしょう。池には柵をめぐらすとか、古井戸があったら必ずふたをしないといかぬとか、川には近寄るなどか、そういうことばかり言っている。昔の子は、そんなことはみんな平気だったわけです。というのは、何が危険で、そういう危険をどうしたら乗り越えられるかということをお子さんは子供なりに全部知っていたし、それだけの力を子供というのは持っているんですね。今、何とか力というのがはやっていて、老人力ということまで言われていますが、子供の力を皆さん過小評価し過ぎている。子供というのは、もっともったしたたかなものです。

私は、子供を自然に親しませたいから、ボルネオジャングルスクールというのをやっていて、ことしで9回目です。ボルネオの原生林へ小学校6年から高等学校3年までの子を

26人連れていきます。そこにマレーシアの子供が8人入るわけです。ひ弱い子もいますよ。けど、だんだん、だんだんたくましくなっています。あそこは森の中に川が流れています。そこは寄生虫もおりませんし、安全な川ですが、そこへ連れていくと、マレーシアの子がばばばっと入っています。みんな何となくうらやましそうな顔をしている。そのうち、おずおず入りかける。熱帯雨林の中ですから、川へ入ったら本当に気持ちいいですよ。何人かが、そこで泳がないかと言い出して、だんだんなれてきて、子供たちが泳ぐようになりました。そうすると、もう夢中です。あれもおもしろいんですよ。今の子というのは、人の前で裸になるのが余りないんですかね。暑いから、男の子が脱いでいる子がいると、あいつはエッチだとか、みんな陰で言っていますよ。ところが、川遊びに夢中になると、小学校5、6年の子なんて、振りちんで走り回っています。そんなことも全部忘れちゃっているんですね。

それはよかったけれども、1つ事件を起こしましてね。パスポートを紛失しちゃったんです。パスポートは、ひもでくくってぶら下げてあります。肌身離さず持つとれと言うたんです。川で泳ぐために肌身離しちゃったでしょう。言い方も気をつけないといかぬ。肌身離さず持っているときはいいけれども、肌身から離したらもうだめなんですね。結局、流れんと出てきましたけど。

それで、3年前からは、初めから水着を持って行って、そこは非常にいい滝壺がありますので、そこでみんな泳ぐんです。もう夢中ですよ。みんなこんな水に入るのは生まれて初めてですが、子供の本能みたいなものですよ。魚がたくさんいるから、とにかく追っかける。これも狩猟本能みたいなものです。

水というのは不思議な感覚のもので、大体皆さんお風呂が好きだと思います。ぬるい湯につかっていたら、ぼうっといつまでもつかっていたい感じになるじゃないですか。あれ、何でしょうね。私はこう思うんですよ。我々が生まれる前は、お母さんのおなかの中の羊水の中にいたんですよ。9カ月水の中に暮らしてきているんです。もともとは水生動物なんです。だから、お風呂へずっとつかっている、あるいは川の中でぼうっとしているというのは、私は羊水感覚じゃないかと思うんです。自分の心のふるさとへ帰っていく。それが水というものに対する我々の基本的な郷愁であります。子供たちは、そういう感じをすごくよく知っているんですね。ですから、今我々が川を大事にしようというときに、ただ治水、利水という問題だけじゃなくて、広く文化の問題、それから、我々の子供を育てる一つの場、そういうものを考えてやっていきたいというふうに思います。

武庫川の総合治水へむけてという提言、本当に画期的なものだと思いますし、兵庫県というのは先導的な政策をやっていかれる県だと私は思っているんです。いつかもトップレベルの有識者が集まって話したことがあるんですが、兵庫県はおもしろいなとみんな言っているんですね。確かに、自然学校を小学校5年生全員がやりますね。それから、トライアルウィークは文部大臣まで見にきました。もう全国版です。それから、野生動物の被害で今物すごく困っているわけでしょう。シカだとかイノシシだとかクマがうろついてます。そういうものの保護、管理の施策は、日本は残念ながら途上国以下だと私は思います。これは環境庁がサボっているんですけども、それに対して、この4月には青垣町に県の立派な保護管理の研究施設ができました。そういう野生動物との共存というものもきちんとやっていく。これも日本で初めてですね。そういうことを次々やっていかれるような県ですから、川についても非常に画期的な先導的な政策がとられることで、ほかのモデルになるようなことをやってほしいなというふうに私は願っておりますし、期待しております。

ちょっと時間が超過したんですが、具体的なことは後のパネルディスカッションで皆さんがおっしゃっていただけたらと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

○司会 どうもありがとうございました。

一番大事なのは川が好きになること、理屈じゃない、本能であるともおっしゃいました。このお話をお聞きして、まさにそのとおりだなと思って、ドキッとしました。武庫川づくりの基本を学んだ思いでいっぱいでございます。

それでは、お話しいただいた4つの配慮を覚えておいていただいて、次のプログラムに進んでまいりたいと思います。

武庫川流域委員会では、昨年8月に「武庫川の総合治水へむけて」という提言を出しました。その中にはハードな川づくりだけではなくて、流域連携、いわゆる川がむすぶ人と地域に関することもきちんとうたわれております。

その提言とは、武庫川づくりとはどのようなものであるのか、川がむすぶ人と地域、流域連携の推進に向けてということで、武庫川流域委員会の委員長を務めております松本誠委員長からお話をいただきたいと思っております。

スクリーンには、流域委員の伊藤益義委員が編集しました「武庫川散歩」という映像を流します。一部の武庫川をご存じの方も、上流から下流まで一流れの武庫川の魅力や現状をぜひごらんになってください。

○松本委員長 武庫川流域委員会の委員長をしております松本でございます。きょうはどうもありがとうございます。

今の河合先生の基調講演、私たちがなぜ川づくりに取り組むのか、なぜ河川整備と言わずに「武庫川づくり」というふうなキャッチフレーズをこの流域委員会が掲げてきたのか、改めてかみしめさせていただく思いでした。ありがとうございました。

今からパネル討議に入りますが、今回のパネル討議は、「川がむすぶ人と地域」というテーマを掲げました。私たちは、昨年8月に提言書を提出した中で、最終章で、流域連携の推進へ向けてというテーマを掲げました。武庫川づくりを進めていくためには、住民参加の武庫川、流域住民が、そして流域の自治体が、河川管理者である県と一緒にあって、さらには流域の事業者とも一緒にあって、武庫川づくりを進めていきたいというふうな願いからであります。映像と話とはかかわりなく、「武庫川散歩」を皆さん方に楽しんでいただこうと思って、流域委員の伊藤委員が、県の持っているデータ、写真を使って、空中から武庫川の河口から上流を俯瞰する映像をつくってくれましたので、それを見ながら、私のきょうのパネル討議のイントロをお聞きいただきたいと思っております。

私たちが総合治水へむけての武庫川の流域連携を進めていこうというのは、今申し上げ

た流域の住民と事業者、そして自治体が、河川管理者の県と一緒に川づくりを進めていく、そのことが極めて大事なんだと、基点はここに置いております。総合治水というテーマを掲げたことも、流域連携が必要な極めて重要な背景でございます。流域対策1つとっても、あるいはまちづくりとの連携をとっても、従来のように河川管理者が、行政が、一方的に単独で事業を行っていく、川づくりを行っていくことは、到底不可能な時代に入っているわけでありまして。したがって、流域のあらゆる住民、事業者、自治体等と一緒に何をやっていくか、それぞれの役割を認識し、川に365日かかわっていく。そのための仕組みを私たちが今からどのようにつくっていけばいいかということをご提言したわけでありまして。そのことによって、住民参加の川づくり、参画協働の川づくりということが実現していくのではないかと思います。

お手元に提言書の概要版をお届けしております。この最後の章に私たちは、「総合治水の武庫川づくりを推進するために」という章を設けております。これは、行政の取り組み体制、流域連携の取り組み体制、武庫川の基本方針、整備計画が策定された後もどのように計画実施段階の参画協働の流れをつくっていくか、実際に行っていくかというふうなところについての提言でございます。

提言書の提出直後から、県は、この総合治水への取り組み体制を組織的に明らかにしてきました。提言にこたえて、昨年10月から副知事をトップとした武庫川総合治水推進会議というのを設置したり、武庫川対策室とか武庫川企画調整課というふうな担当セクションを新設したり、あるいは自治体との協議組織を幾つか発足させるなどを行ってきております。

私たちは、こうした県の取り組みをさらに加速させていくためにも、地域の住民と自治体がこれからの武庫川づくりへの取り組みにどのようにかかわっていったらいいのか、具体的に検討する段階に入りつつあるのではないかと思います。具体的には、武庫川流域のあらゆる住民や住民組織が連携していく流域圏会議とか、調査研究を研究者と住民あるいは自治体職員が一緒に行っていく武庫川学会のようなものも提言をしております。

しかし、現実には、きょうのパネル討議の中でも明らかにしたいと思っておりますが、そのような流域の連携を進めいくために、武庫川では大変難しい課題を抱えております。先ほど河合先生のお話の中にもありましたが、武庫川といたらダムの問題かというふうなことが常にあって、武庫川になかなか素直に取り組めない。子供たちを川で遊ばそうと

ということで、教育、あるいは住民団体とが一緒になって、そのような事業を行っていかうとすることについても、いろいろな障害がある。そういう現実が、私たちの3年間の委員会活動の中でも明らかになってきました。

このような現実を踏まえて、きょうは、私たちは今なぜ流域の連携が必要なのかということを中心から考えてみたいと思います。そして、流域連携はどのようにしてつくって、どのような効果を発揮していくのか、あるいは住民と住民団体が連携を強めていくための条件づくりにはどのようなことが求められるのか、また、流域連携は具体的にどのようなことから手がけて積み重ねていけばよいのか、そのために必要な組織とか仕組みはどのようなものなのか、あるいは上下流の連携がなぜ必要で、どこから手をつけたらいいのか、流域の住民と自治体は何をどのように連携していくのか、こうした課題について、私たちは具体的な手だてを手にしたと思っております。

そのために、本日のパネル討議では、全国各地の流域連携にかかわる取り組み、実践事例を学んでいくということを第1の主眼に置いております。川にはそれぞれ表情があり、さまざまな条件があります。私たちは、全国で取り組まれたことがそのまま武庫川で実践できるとは思っておりません。全国での経験を私たちの宝として、それを武庫川にどのように生かしていくかを見出していくのが本日のシンポジウムの課題だというふうに思っております。

では、どうしたらいいかということはこの後のパネル討議でしっかりと議論していきまう。一緒に考えていただければと思います。よろしくお願ひいたします。(拍手)

○司会 ありがとうございます。駆け足の説明でしたけれども、武庫川流域委員会が意図する総合治水、武庫川づくりをご理解いただけましたでしょうか。

それでは、ここで7分間の休憩を挟みたいと思います。

(休憩)

○司会 それでは、定刻となりましたので、始めたいと思います。

前半では、河合先生に武庫川づくりの基本のお話をいただき、さらに武庫川を知っていただいたところで、いよいよ流域連携による川づくりをどう進めるかという核心部分に入ってまいりたいと思います。後半のプログラム、パネル討議に進みたいと思います。

パネリスト、コーディネーターの紹介をさせていただきます。

まず、パネリストをご紹介いたします。時間の関係から、プロフィールはプログラムをご参照くださいますよう、お願ひいたします。

まず、吉村伸一流域計画室代表取締役の吉村伸一さん。(拍手)

矢作川漁業協同組合長の新見幾男さん。(拍手)

千種川圏域清流づくり委員会ネットワーク部会長をされております横山正さん。(拍手)

東京大学大学院農学生命科学研究科附属愛知演習林で講師を務められており、武庫川の川づくり勉強会でおなじみの蔵治光一郎さん。(拍手)

コーディネーターは、武庫川流域委員会で委員長を務めております松本誠です。(拍手)

それでは、コーディネーターにマイクをお渡しいたします。よろしくお願いいたします。

○松本 では、ただいまからパネルディスカッションを始めます。

きょうのパネル討議のテーマは、先ほどご報告させていただきましたとおり、流域連携による川づくりをどう進めていくのか、全国各地でどのような具体的な先見事例があり、私たち武庫川では、それを生かしながら武庫川らしい連携を具体的なものにしていくにはどのようにしていったらいいのかということをつかむことが目的でございます。きょう、1日の討議、限られた時間で、その作業は決して完結するわけではございませんが、これからの長い武庫川づくりに向けて船出をしたいと思っております。よろしくお願いいたします。

きょうは、お忙しい中、遠方から4人のパネリストをお招きしております。最初に、それぞれのお立場から、どのように流域の連携というのは進めていくのか、それぞれの実践、あるいはそれぞれのお仕事での取り組みの知見から、問題提起をいただきたいと思っております。その後、武庫川ではどんな課題があるのか、どんな難儀な問題を抱えているのかということについて、この問題を議論してきました武庫川流域委員会のメンバーから、私の指名によってフロアからコメントを出させていただきます。それを含めて、全体で課題について一つ一つ議論をしていきたいと考えております。

時間の関係上、会場の皆様方に直接ご発言をいただくことは難しいかと思っております。お手元のアンケート用紙に、きょうの議論に関してのご質問等があればお書きいただいて、一通りの発言が済んだところに、私が合図しますので、お手を挙げていただければ、事務局が回収に上がります。すべてに答えることはできないと思いますが、その中から幾つかチョイスして、この討議の中でパネリストからお話をいただきたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

早速ですが、最初に、吉村伸一さんにお願いします。

吉村さんは、もともとは横浜市の行政マンとして川づくりにかかると同時に、市民の

川づくり運動を担ってこられました。そして、もうその範疇にとまっておれぬということで、川づくりの専門のコンサルタントの仕事を始められて、全国を飛び回っておられます。その豊富なご経験から、川づくりにおける流域連携について、全国の状況を踏まえてお話をいただきます。よろしくお願ひします。

○吉村 吉村です。横浜から来ました。きょうのテーマは流域連携ということで、どういふお話をしたらいいかわからないんですが、幾つか材料を持ってきましたので、お話をしたいと思ひます。

河川法が改正されて、河川整備計画への市民参加としては、どういふ計画をつくっていくかということで市民参加が行われているケースが多いです。河川整備計画をするときに、市民参加に対する既成の概念といふか、今やっていることは、集まった市民が意見を出し合っ、ファシリテーターとかそういう運営者がいるんですが、意見をまとめる。そして、意見を反映するといふ形で、整備計画への市民参加が行われています。建前上、意見を整理して、それを反映するといふことは非常に大事だとは思ひんですが、ちょっと違うんじゃないのといふ感じを私は持っています。

(スライド)

この三角形でいふと、意見といふのは上位の概念であって、考え方です。考え方といふのは、たくさんあるわけですが、これはすぐまとめることができます。河川管理者もできます。私もこういう仕事に携わりますけれども、自然が豊かな川とか、親しめる川とか、安全な川とか、3つ、あるいは4つでもいいんですが、まとめることができます。でも、この川をどうするかといふたときに、この川はどういふ川なんだろうといふことがしっかりしていないと、治水も利水も環境もいい計画はできない。ここを飛ばして意見を聞こうとする傾向があるといふふうに私は思っています。

私がきょうお話ししようと思っことは、先ほど河合先生が全部おっしゃいました。といふのは、川の実態は自分の子供のころからのことで心にしんでいる。体にしんでいるといふことです。今意見を出し合っても、それは体にしんでいるわけではないわけですが。あるいは武庫川といったら、固有名詞ですが、普通名詞みたいなものです。武庫川といふ名前だけを使っているわけで、武庫川のどこがどうなのといふことは全然伝わってきません。大事なことは、どこにどんない場所がある、あるいは昔はいい場所だったのにこうなっみたいなどころをみんながつかんでいく。そういうことが市民参加のすごく大事などころだと思ひます。そこの基盤の取り組みが不足して意見を言っているといふところがあるのではな

いかと思っています。

岐阜県と愛知県を流れて、上流は土岐川、下流は庄内川と言われている川があります。中部で言えば、先ほどの木曾三川は有名ですが、ちょっと汚いということもあって、余り有名ではない—東海豪雨で有名になりましたが、あの川はすばらしい川です。ここと同じで、溪谷を持っています。その河川整備計画を決めるときに、市民参加の運営の業務を私の方でやったんですが、そのときに私が重視したのは、みんなが情報を出し合って、現場へ見に行くということ、それをベースにしました。もちろん意見も整理しますが、あなたが言っているいい場所とか、いい川にしたいというところはどこでしょうかということ、地図に落とすという作業をして、それをみんなで見に行くということをしました。1年半で10回です。

上流から下流まで100kmありますから、Aさんの意見は、上流に住んでいて、自分の目の前のことを言っている可能性があるわけです。Bさんは、最下流にいるということもあるわけです。一番大事なことは、意見をまとめるということよりも、最上流から河口まで、この川はどういう川なんだろうかということ、みんなで見つけていく作業だと思います。

市民意見交換会といいますけれども、土岐川、庄内川はこういう川なんだということを整理する。河川整備計画への市民参加の提案書の中身として、この川の上流から下流まではこういう場所になっている、非常に大事にしたいと思っている場所はここですみたいなことを地図をあらわすということをしました。

河川管理者は、治水上ここが流下能力が足りないから、ここは広げなければいけないとか、そういうことはよく知っているんですけども、どこにどんないい場所があるかというのはほとんど知らないです。ですから、そういう情報を出す。環境を新たに位置づける、環境計画を立てるということは、どこにどんないい場所があるかということを知らないとプランの立てようがないです。それは言葉ではなくて、どこにこういう場所があるから、これは大事にしようということ、参加したみんなで地図にして提出しようというスタイルをとりました。私が行政にいたときも、それが大事でした。行政から見えないこと、知らないことを教えてもらうということがとても大事で、それは行政にとって活用できる資料になると私は思っています。

ところが、そういう計画センスとか計画能力がなかったら、これを生かせないんです。このマップを生かせるかどうかは、河川管理者の計画能力とか姿勢にかかわってしまっていて、その辺はちょっとクエスチョンマークかもしれません。だけど、大事なのはここだと思っ

ています。

これは、1年半で任期を終えて、提言をして、行政の計画ができて終わりではなくて、自分たちがやれるところから始めましょうということで、改めて公募による土岐川庄内川交流会というのを2年前に立ち上げました。何を始めたかということ、1つは、上条河畔林水辺プロジェクトということで、この人たちは春日井市の人たちです。内津川というのが合流しているんですが、そういうところから桜の並木道を川沿いにつくっていきたいということでした。しかし、どこに桜を植えられるかというのがなかなか難しいところがあります。

(スライド)

そういう中で、ここは広い高水敷があるところで、一部は市民農園として使われています。水辺にこういういい河畔林が勝手にありますけれども、ここは入っていけないので、この草刈りを始めようということになりました。

さっきスライドも見ましたが、木陰一つない川になってしまっています。勝手に生えている木があるけれども、ここの水辺、河畔林は荒地になっていますので、この下草刈りをするによって、すてきな水辺になっていくわけです。この活動は、ここを拠点に去年の4月から月1回、春日部市のグループが中心になって始めています。

ということで、荒地になっていた場所が、人が手入れをすることによってすてきな場所になっていくという活動がここに1つ生まれてきたわけです。整備計画を幾らいい計画をつくっても、あるいは意見を言っても、それが計画に反映されない、計画に反映されたとしても、だれも動かないとなると、何も変わらないわけです。こういうことが起きてきたということはとても大事だと思います。庄内川は、何かをつくるというよりも、既存の資源を使ってすてきな川に変えていくということです。

庄内川では、こういう場所はたくさんありますので、そういうグループがあちこちに出てきて、そういう働きかけがあちこちで起きてくると、いい川になるというふうに見ています。そういう動きが1つ出てきたということです。

もう1つは、上流は土岐川と言われて、岐阜県にあるんですが、その水質はまだかなり悪い。夏場、pHが9とか10とかに上がります。いろんな問題があるんでしょうけれども、その水質調査と生き物調査をやろうということで、去年3回、5地点でやっています。水質調査よりも、魚とりにみんな夢中になっていまして、こういう川でもいろんな生き物との出会いがあります。参加した市民は、最初は意見を出し合ったり、情報を出し合

ったりの言葉の世界でしたが、そういうことでフィールドに行くということが始まっています。

ネコギギというのは、天然記念物で、三河湾とか伊勢湾に流れる川にしかいない、とてもかわいらしい夜行性の魚です。こういうものもいるということを確認しました。

土岐川、庄内川というのは、岐阜県の夕立山という 750m ぐらいの山が源流となって、河口の富士前干潟まで 100km あります。市民意見交換会的时候は、みんなで情報を出し合っていて、そこで出てきたポイントをバスで見に行くということをしていたわけですが、それではこの川はわからないという話になって、源流から河口まで全部歩こうということを始めました。これもプロジェクト方式でやりました。上条河畔林プロジェクトはプロジェクトでやって、全区間踏破プロジェクトはプロジェクトで、そのとき来れる人が来ればいいと。こういう催しは、雨天決行でやらないと日程調整ができませんので、雨天決行です。昨年1月14日にスタートにして、ことしの4月で全区間歩きました。14回で 100km です。1日6～7kmを五、六時間かけますので、朝9時に集まって、3時か4時ぐらいまで歩きます。

最初はひどかったんです。雪が降って、雨の中ずぶぬれになって、帰りにはだれも一言も発することができないくらいさんざんなものでしたが、これ以上悪いことはないだろうということで、始めました。

これは2回目です。上流へ行くと、堤防ではなくて、こういう掘込みの河道になっています。こういうすてきな農業用の木橋とか吊り橋とか鉄の橋とか、8橋ぐらいかかっています。こういうものに出会えました。

造り酒屋なんかも結構あります。瑞浪市にある中島醸造、もう1つ若葉酒造というのがあって、その試飲会があるということで、途中でスキップして酒を飲みに行ったりしています。

東海豪雨のときの水位はここだというんですが、もっと水位が上がったときもあったということが、歩いてみて初めてわかるわけです。

5回目のときに源流に行きました。ここは湿地からじわっとわき出てくるような川です。湿地の植物が咲き乱れているすてきな場所です。だんだん下流に下って行って、盆地が幾つか連なっていて、そこに溪谷が幾つかあるわけです。

玉野溪谷というのは、春日井市から多治見市まで9kmにわたってあります。水はいまいちですけども、すばらしいところです。高倉山と東国山という名古屋で一番高い山の間

で、向こう側が平野部になっていく。そういうところを歩いて、河口にとりあえず着くということをしたわけです。

土岐川庄内川マップという形で、こういうふうにもとめています。とにかく歩いて、どこにどんなすてきな場所があるか、この川のここに行ってみたいという場所を整理しました。とりあえずの整理で、これを市民に配れるようなガイドブックにしたいと考えていますが、私は業務で手伝っていますけれども、今のところ業務発注がないので難しくなっておりますが、こういう魅力を発見することがとても大事だと思います。

何をやるにしても、その川の豊かさを実際その場所に身体を運んで確認するという作業を多くの人ができない限り、武庫川をどうこうするといっても、概念的なことになるんじゃないか。川に行くということが大事だと思います。

ネットワークのやり方はいろんな方法があると思います。武庫川の場合、どれぐらいの団体が活動しているのかわかりませんが、やっている活動があちこちに散らばっていないとネットワークはつくれません。全区間歩いても60kmですから、歩くことから始めて、この場所を私たちのグループで何とかしようというのが出てくるのが大事だと思います。

横浜でやっているのは、ことし10年目ですけれども、横浜川のフォーラムということで、横浜市内には幾つも水系がありますので、そこで活動しています。必ずしも川だけの活動ではなくて、ボーイスカウトとか三十数団体が、毎年1回、6月から8月を行動月間にして、それぞれのフィールドで、それぞれのやり方で活動する。統一の行動はしないんです。それらを毎年9月に持ち寄って、我々のグループは、宮川なら宮川でどんなことをしていますということで、交流する。1年に1回やるという緩やかなもので、集まる前にそれぞれの場所でやりましょうといった交流の仕組みにしています。

私、とてもいいなと思っているのは、岡山の旭川流域ネットワークで、これは源流に碑を立てるという単純なわかりやすい行動です。源流というと1つじゃないかということ、旭川というのは200ぐらい支川を持っていて、200年間できると。源流の碑というのを木でつくって、そういうものを下流から上流まで2カ月ぐらいかかって運ぶ。それぞれの市町村で、お出迎え、バトンタッチをするというようなことをやっています。こういうような手段で川をずっと歩いていくということをするわけです。そして、その場所で交流すると。やり方はいろんなことを考えるといいんじゃないでしょうか。

もう1つは、先ほど河合先生からありましたけれども、日本の川はいじくり過ぎています。

横浜の川で、和泉川という川ですが、私、去年土木学会のデザイン賞の最優秀賞をいただきました。

暮らしの中を流れる川ということで、3時以降にこの川へ行ってください。子供たちが放課後、かばんを置いて、川で遊んでいます。そういう場所を残していく、あるいはそういう場所をつくっていくということが大事ではないかと思います。

話題提供ということでお話をしました。(拍手)

○松本 ありがとうございます。幾つかの具体的な実践事例、とりもなおさず川の価値を発見するプロセスを重視しようじゃないか、まず行動を起こすという今のお話を聞きながら、武庫川流域委員会で武庫川カルテという作業を委員がかなりエネルギーを投じてやってきて、今それをガイドブックにしようという行動を起こしておりますが、そういうことも今の話につながるんだなという感じを持ちました。

次は、お二人の方から、それぞれご自分の住んでおられる地域の川で取り組んでおられる流域連携の試みをお話しいただきたいと思います。

最初に、同じ兵庫県、武庫川は兵庫県の東の端でございますが、兵庫県の西の端、岡山と姫路との間にある千種川、西日本で有数の清流と言われておりますが、ここで六、七年前から千種川圏域清流づくり委員会という連携組織をつくって、住民と自治体、そして河川管理者の県とさまざまな取り組みをしておられる横山さんをお願いしたいと思います。

○横山 横山です。兵庫県の西の端の千種川、行ったことがあるよという方がおられましたら、ちょっとお手を挙げてくださいー。たくさんおられますね。ありがとうございます。僕も、そこで育ってきたわけなんですけど、今までの先生方の話を聞きながら、これもあった、これもあったということで、いろいろ整理させてもらいながら聞かせてもらって、勉強になっております。

(スライド)

今画面に写っているのは、僕の住んでいる上郡町苔縄という村です。歴史に詳しい方は、足利尊氏の時代に赤松円心則村という悪党と呼ばれる武将がいたのをご存じかと思います。尊氏が新田義貞に追われて九州へ逃げる途中、赤松氏が白旗山という城を新田義貞を拠点に食い止めまして、その間に尊氏が九州へ逃げて勢力を盛り返して、もう一回戻ってきて、幕府を立てたと。その円心の建てた法雲寺というお寺、金閣寺の兄寺に当たるわけなんですけど、江戸時代にもう一回落慶法要を行ったときの絵図が残っておりました。

これが寺ですが、この前を流れているのが昔の千種川です。この辺は現在は村になって

おりますが、昔はこの辺はほとんど人が住まずに氾濫原、湿地だったようです。道路がここで終わっておりまして、ここから岩が並んでおります。ここに渡し船があったんだなということが、地図の中の細かいところを見ると見えてきます。本来の川の姿はこういう姿だったんだなというのを見て、僕もびっくりしました。

この写真は、ついこの間、うちの家の納屋で発見したんですが、僕の村の苔縄橋という橋が大正14年にかけてられたときの渡しぞめの写真です。聞いてみると、たまたまうちの家族が三世代住んでいたの、そういうときに先頭を歩くということだったそうです。ご先祖さんなのでよくわかりませんが、この風景とか河原の様子とかを現在の川と比較することができて、昔の川はこんなだったんだなというのを見て、びっくりしました。

これは、僕が子供のころ、昭和40年ぐらいの写真です。渡しぞめのときにもこういう陸橋がありましたが、裏の山の風景などは同じです。ここが洞門になっていますけれども、先ほどの古い地図では、渡れないので、ここから渡し船があった場所です。

こういった自然の状態とともに、手前の辺を見ていただくと、昔の川の風景の一つでもあったんですが、これは若い方はわかるでしょうか。お年寄りの方は、ああこんなあった、あったと思うんですけども、ごみ捨て場なんです。畑や家でごみはすべて河原へ捨てる。物は焼く。ごみ捨て場が川の一つのよくない利用法だった。洪水が出たら流れていく。何でも水に流すというのが日本人の悪いところだと思いますが、そういう状態が写真に残ってありました。

河原の様子も、このころツルヨシが少しずつ生え始めていたんだなということがこの写真から見てとれます。現在はこの辺はすべてツルヨシになっています。

これが2006年ですから、一昨年です。台風21号の被害で、流域のたくさんの方々が浸水しました。23号は豊岡の方で有名になりましたが、あのときは風が強くて、家の瓦が飛んだり、特に上流ではスギの風倒木がたくさん出るなど、風害が出たというダブルパンチの年でもありました。

その後の冬の写真ですが、この辺のツルヨシとか土砂は流されてしまっておりまして。橋の様子、後ろの背景の様子、さらに洞門があったり木があったりというところは、道路の拡幅のためにすべて広げられて、コンクリートむき出しの状態になっております。橋脚のあった場所とか橋のつけ根の岩が辛うじて残っている。こういうふうな変化が見えます。

これが40年代のかつての少年です。今ここでしゃべっていますが、夏はとにかく毎日こうやって川で遊んでいました。必ず大人の人がついてきてくれて、交代で監視をしてくれ

ていた。そんな中でも、僕も何度か経験がありますが、何人かその場で溺れたというようなことがあって、死にはしなかったんですけども、死にかけたのを見たことがあります。

今と比べると非常に水量が多かったんだなど、写真を見ると、昔の川の状態を思い出すことができます。

これは、もうちょっと大きくなった、ひげはありませんが、私です。昭和41年ぐらいだと思いますが、このときも、多分洪水があったと思います。向こうの方、たくさんテトラをつくって、復興工事だと思います。

春の風物詩というか、ウグイ釣りです。産卵のため海から上がってくるウグイを釣って楽しむということで、キャッチアンドリリースじゃないですけども、学校が終わったら毎日やっておりました。こういうことはすべて祖父とか、年長のお兄ちゃんたちが教えてくれました。

河原のツルヨシは、この時代はまだ少なかったんだということがわかります。

こういった千種川での原体験というか、千種川に対する思いが私にはありましたが、同じことが流域に住んでおられる皆さんに根づいていたと思います。ただ、昭和50年前後にプールができて、川での水泳が禁止されてから、今の30代から20代の方は川の経験というものはほとんど持っていないと思います。

そんな中で、源流の町、中流の町、最下流の町のそういう思いを持った住民と各市町の河川の担当者、県の河川担当者が連携して、川づくりを一緒に考えようということで立ち上がったのが千種川圏域清流づくり委員会です。全然知らない面々が、会を重ねるごとに、同じ思いで、あるいはこの人はこんなことができるんやということをお互いに知り合うことで、だんだんつながりが濃くなっていきます。行政の方とも飲み会をしたり、イベントのときに一緒に行動することで、だんだん親しくなっていく。そうして、いろんな情報交換ができるようになってきたという経緯があります。

(スライド)

これは、毎年4月、5月に行っているアユの遡上を観察する会です。実は、遡上を見るのではなくて、この魚道は遡上に非常に悪いので、遡上できていないのを見ているところです。上れたものは、際のわずか数センチの流れの弱いところをびゅっびゅっと上がっていきます。

この後下流側において、河口のシジミを掘ったり、ウナギの稚魚が潮が引いたときに泳いでいるのを見つけたりします。

これは人気が高いので、毎年やっているイベントです。本年度は、アユの稚魚の遡上が全く見れませんでした。多分雪が少なく雪解けの水が少なかったためだと思いますが、漁協の方も、こんなこと初めてやと非常に驚いておられました。科学的な調査をしておりませんので、原因は定かではありませんが、来年度以降そういうところを見ていきたいと思っています。

委員会の活動の一つですが、県の魚にやさしい川づくり検討会というのに入っていて、そこでの検討の結果、生命線の1つである河口堰の遡上の問題を何とか解決しようということで、本年度河口から2カ所改修に入るという成果が出ています。

これが下流側のシジミがたくさんとれる場所です。非常に安全ですので、小さいお子さんから大人まで楽しめるイベントです。

これは、昨年度の7月19日の洪水の状況です。目の前まで水が迫って、あと50cm水位が上がっておれば、一昨年の洪水と同じような状況になったところですが、このときには大きな被害は出ませんでした。毎年何回かはこういうふうな増水を間の当たりにします。川が目の前にあるという生活の中で、そういうことが見られるというのが千種川の一つの特質ではないかと思っています。

こういうときには、男の人たちが土手に上がって、水がどうなっていくかを見張っているとか、見物している姿も見受けられます。子供は危ないから来たらあかんと言われていましたけれども。

夏にも同じようなイベントをします。自然を直接体験するというので、その1つのテーマとして、川で遊んで、学ぶと。そして最終的には、ここにいるような川ガキと呼ばれる子供たちを復活しようというのが僕らの合言葉です。昨年度からは、自分でとってそれを食べる「採って食らう！」というようなことを表に出してやっております。昨年度は、地元だけではなく、神戸方面、姫路方面からもバスに乗って参加してくださいました。

浅くて安全な支川が千種川流域には何カ所もあります。こういうのも大きな資産だと思っています。残念ながら、地元の子供たちの参加は非常に少ないです。何でやろう、それがこれまで疑問でしたが、だんだんわかってきたのは、ふだん余りにも当たり前にあるので、なかなかそういうところに行かない。でも、一たん行ってしまえば楽しいので、次には来る。リピーターの子は毎回来ます。できるだけ大人が面倒ぐさがないように体験させてやる、呼び水をしてやるというのが大事なことだと思います。

川魚はおいしくないと言われる人もたくさんいますが、自分でとって、空揚げにして食

べると、みんなおいしいと言います。

これも、毎年夏の活動です。上流、中流、下流にいるメンバーが流域の人たちに呼びかけて、約 100 地点の水温を一斉にはかります。夏の最高水温が生物の生息に非常に影響するという人博の先生からのアドバイスを受けて、ネットワークを利用してはかってみようということで、ことしで6回目になります。温度計1本でできることですので、だれでもできる。それを情報地図にすることで、いろいろなことがわかってきました。

川は、上流ほど冷たくて、きれいだろうと思っていたんですが、そうじゃない。中上流でも、35℃を超えるようなところがあると。最初は温泉かと言っていたんですが、現地に行ってみますと、農業をやられている方はご存じだと思いますが、取水のための風船ダムが 200m 間隔ぐらいで並んでいます。まるで池みたいで、真夏は 30℃を超えるようなお風呂になっています。当然アユはすすめませんし、魚道もないので、魚、カニ類も遡上はできません。

逆に中流であっても、冷たいところがあると。河川が合流しているところを重点にしているんですが、その付近は、本流は温かくなっているけど、谷川から流れてくる冷たい水が水温を下げています。そういう場所には、夏の水温が高いときはアユが集まっています。地元の漁師さんたちは、そういうことを体験的に知っていて、渇水の暑いときには谷川の合流地点に網を入れます。そういうことがこういう簡単な調査でわかってきました。

こういう生態調査は全国でも例は少ないと思います。武庫川でもできることだと思いますので、これをきっかけにして、一緒に行動するといったことができるんじゃないかと思っています。

同じ中流域の上郡には安室川という支川がありまして、本州では数少ないチスジノリという紅藻類ーノリの仲間ですが、希少種が残っています。きれいな川ではないんですが、湧水があります。といっても、こんこんと出るのではなくて、川からしみ出しているような湧水ですが、それがこういう生物がすむ特殊な環境をつくっています。

この川を自然再生しようということを県の事業としてやっています。子供たちと一緒に取り組もうということで、川の石の表面に堆積した泥とかをきれいにする。ひっくり返したり、たわしで磨いたり、がさがさ歩くだけでも、川が濁って泥が流れるわけです。そういう場所にチスジノリが復活できるんじゃないかということで、自然再生事業を子供たちも参加する形で毎年やっております。

最上流にはオオサンショウウオが生息しています。委員会に参加しているグループの 1

つとして、オオサンショウウオを守る会の皆さんがおられます。月に1回の調査のときに、下流に住んでいる私たちも参加させてもらっています。行政の担当者の方も一緒に参加して、懇親会をするというふうなことをやっております。季節によっては子供たちが来てもいいということで、ふだん見れないオオサンショウウオを間のあたりにすることができず。こういうことが続けられております。

今度は、流域の連携ではなくて、横の連携というか、県下の川に関係する者の連携ですが、兵庫の川サミット連絡会というのがあります。これまで、県下の川で毎年順番にフォーラムを開いていました。それが一通り回って、その準備とかも大変だということで、昨年度からは県下の川を実際に行って体験しようということをやっております。

資料の中にもあると思いますが、本年度は千種川が行き先になっております。僕もまた案内させてもらいますので、もし興味があったら、千種川へ遊びにきてください。非常に幅が広いので、夏と秋の2回に分けて行おうと思っております。

流域の委員会として、それぞれ特徴を持った人がいますので、それを生かして、いろいろなイベントや会議に参加していているという状況です。もちろん、メンバーの一人一人は、それぞれの地区でそれぞれの活動を持っているという形です。

いろんな委員会、会議に参加させてもらって、一番下にいる者たちが上の方の会議で意見を言う機会、チャンスを持つということもあると思います。ただ、いろいろな課題もあります。連携という言葉は簡単なんですけど、70km離れている人間が日常的に顔を合わすことはほとんどありませんから、お互いに知り合うまでに何年もかかりました。連絡をとるにしても、今のようにだれでも携帯電話でメールを送れるという場所でもないの、事務局的な機能、間に立って調整してくれる部署が非常に重要です。行政との連携というのが非常に大きな特徴ですが、担当者が二、三年でどんどんかわられるので、その方によって思いが変わっていくというところが気にかかるところです。県土整備部とのパイプは残っても、地元の役場、市役所の土木の担当者はかわりますので、地元とのパイプを何とか戻そうというのが今の活動の状況です。

それと、若い人たちの参加が少ない。今聞いておられる中にも若い方は非常に少ないと思うんですが、それは川に対する思いが育っていないからではないかと思えます。そういう意味で、子供たちを10年後の若者と育てていくことが非常に重要だと思います。

もう1つは、千種川は、いいなとは言われるんですが、現実はなかなか盛り上がりません。寝屋川とか大和川と比べるときれい過ぎて、することがないというか、それだけで幸

せと思えたらいいんですが、よしやっちゃろかいという機運になかなかならないというのを感じてきました。もう1つは、外部の情報を入れたり、資金的なものを自分たちで手に入れたりということができていない。そういう課題が見えてきました。

ポイントとしては、取りまとめる事務局的な機能と、上流、中流、下流の人のふれ合いをつくることでお互いに知り合うということがスタート地点ではないかと思います。

以上、千種川からの発表です、ホームページ等にも流しておりますので、もし機会があればのぞいてみてください。どうもありがとうございました。(拍手)

○松本 ありがとうございます。兵庫県の我々の身近なところに千種川のような活動が実際にある。残念ながら、兵庫県の東の端と西の端、武庫川流域の方々も、川サミットとかいろんな連携のグループにかかわっておられる方は情報としてはありますけれども、それ以外の一般の市民にはなかなか情報が届かない。マスコミとか新聞でも、地域分割されていますから、こういう千種川の情報が届かないという現実があるかと思います。

清流づくり委員会の発足の最初からかかわってきた私などは、今のご報告を聞いていて、本当にのんびり、ゆっくりした活動なんです、6年続けていくと、しっかりとした連携の実績、地歩を築いてきていると。先ほどの吉村さんのお話と合い通ずるものがあるなという感じがしました。

続いて、きょうは愛知県からお越しいただきました。矢作川という河川は、愛知県、上流は岐阜、長野まで延びている一級河川ですが、矢作川で漁協の組合長もしておられる新見さんです。矢作川漁協は、プロフィールにも書かせていただきましたが、「環境漁協宣言」という全国でも画期的な宣言を4年前に採択されております。ことしは、アユは豊漁というか、物すごくたくさんアユが遡上しているという話をお聞きしておりますが、新見さんから、どのような連携の活動をしてきたかという話をさせていただきたいと思います。

○新見 愛知県の矢作川からやってまいりました。河口から34km地点にトヨタ自動車の本社工場がありまして、それから約10km区間が豊田の中心市街地です。矢作川というのは、ダムだらけの川として有名です。武庫川のように支流にダムがあるということではなくて、矢作川本川がダムだらけであります。どういう結果になるかという、そこから水を取っていきますので、水が徹底的に利用されております。雨が多い年で、年間降雨量の40%、少ない年ですと50%ぐらひは陸上へ取り出して、農業用水、工業用水、上水道用水として使ってしまいます。河川利用率といいますけれども、そのパーセントが20%を超えると、河川環境上は危険水域に達したと言われておりますけれども、私どもの矢作川は、河川利

用率が40%、50%が普通の年でありますので、とっくに危険水域は超えてしまっているわけです。そういう川で、美しい矢作川を創造するというのが最近の我々のスローガンであります。

今から16年前になりますけれども、1991年、平成3年の9月に、豊田市が河川に関係する官庁、民間の私たちのような漁業協同組合、研究者の3種類の人たちを集めて、ヨーロッパ近自然河川工法調査団というのを派遣をしました。それ以降約10年間、矢作川は夢のような日が続いて、あの時代は矢作川の青春時代だったなという話を、官庁の人たちと酒を飲んでもしております。今ちょっと元気がなくなりましたので、もう一回元気を取り戻すぞという話をしているわけであります。

その青春時代のことでありますけれども、最初に矢作川研究所というのができました。官庁がそういうものをつくるという雰囲気がないときでしたので、第三セクターでつくりやということ、まず漁業協同組合と農業用水団体が合議をして、1本の川に1つの研究所が要るじゃないかということで、豊田市長のところへ近自然河川工法調査団の帰国報告に行ったときに、1本の川に1つの研究所が欲しいと思っているということを申し上げたら、つくればいいじゃないかと。いいんですかと言ったら、金を出すからつくれと。そのかわり、市役所が職員を送り込んでつくってしまうとろくでもない研究所になってしまう。当時、交通研究所というのがありまして、今でもあるんですけれども、研究所が自分の研究だけやっていて、豊田市の交通事情はひとつもよくなるという苦い経験を持っているので、そんなものならつくらないぞということになって、とにかく農業団体と漁業団体で人を出せということになりました。私は、その当時、まだ若かったですが、漁業協同組合の環境担当の理事をやっていたと思います。出向で研究所の事務局長をやれということで、都合9年間やりました。

矢作川研究所というのは、第三セクターですので、規制がほとんどなくて、大体が漁業団体の思うとおりにできて、この時期に川の研究がかなり進みました。その子供のようなのが矢作川天然アユ調査会で、これも純然たる民間団体でありますけれども、現在60人ぐらいの組織で、矢作川のアユの生態調査をしております。

矢作川から三河湾一帯の生態調査をやりまして、途中で中部電力とも共同研究をやって、これは大きな成果を上げました。矢作川本川と三河湾のアユの生態はこの人たちが調べ上げたんです。普通ですと、矢作川研究所が民間会社へ委託するんですけれども、そんな調査結果は信じんぞという人がたくさんおりました。天然アユ調査会の会員というのは、大

体がアユの釣り師でありまして、比較的若い人やOBの人—会社を引退した人たち約60名でつくっています。矢作川研究所が生まれて、矢作川天然アユ調査会という外郭団体が生まれるわけです。

アユは、経済魚の扱いを受けておりますので、アユを扱う団体というのは、研究者の間では余りいい思いをしていなかったようでありまして、そういう議論の中で、アユがさまざまな魚の指標になるんだということがあって、納得してくれました。ただ、そのほかに非常にたくさんの種類の魚がいるわけです。そういうものも大切にすることが大事だということを我々も承知しておりました。そういう議論をしているうちに、天然アユ調査会の中から新家ができそうであります。矢作川水族館といたしまして、コンピューター上の水族館が間もなく立ち上がるようになっております。田んぼの中、小川、矢作川本川まで含めて、雑魚の保護をやろうという団体が、間もなく矢作川研究所の孫として生まれる予定であります。

青春時代のような時代に生まれたものに、矢作川川会議というのがあります。矢作川研究所ができたころから、雨後のタケノコのように、市街地を中心に各地に水辺愛護団体などができてまいりまして、自分の庭を管理するようにして水辺の管理を始めたわけです。矢作川川会議は、水辺愛護団体、官庁の河川関係団体、漁協のような魚の団体も含め、現在15団体で運営しております。

年に1回子供釣り大会をやったり、あるいは釣り大会の後、午後に3時間か4時間のシンポジウムを川でやって、シンポジウムが終わると、水辺で大交流会をやると。酒を飲んだり、アユを焼いたり、みんなが料理をつくってくれたりということで、子供を育てるための矢作川学校というのもこの中から生まれてきました。いずれの場合も、漁協は縁の下の方のような仕事を担当しているわけです。

実は、2002年が漁協の創立100周年でありましたので、その数年前から準備を始めて、漁協百年史をつくりました。5人の共同執筆で、それに「環境漁協宣言」という名前をつけて本を出したわけでありまして。先ほど申し上げましたように、矢作川というのはダムだらけの川であります。その中で100年間漁業団体が生き延びてきたわけでありましてけれども、百年史を書いておられますと、歴史を直視しなければならないわけで、それは大変つらい作業です。100年間連戦連敗でまいりました。川じゅうダムだらけになっていくわけでありましてけれども、その中から私たちは幾つかのことを学んでいきます。

今新しいダムをつくる計画が1つあるんですけれども、これはどうしても認めがたいと

いう気持ちを持っております。大きなダムで、多目的ダムであります、どうしても認めがたいから、よく勉強して、簡単にいいとは言わんぞというような返事を今している段階であります。

じゃあ既存のダムをどうするんだということでもありますけれども、いろいろな改良をしてもらっております。改良を通してアユがすめる矢作川をつくるという方向にしております。

「環境漁協宣言」は、そういう流れの中でできた漁協の歴史の本であります。「環境漁協宣言」の基本的な中身は、私どもが100年間連戦連敗であったという深刻なことから考え出したことでもありますけれども、いろんな工事があっても、その補償金はもらわないということです。そして、今から第2段階へ進むわけでありまして、自己規制できる組合、また組合員にしていこうと。産卵期にむちゃくちゃ魚をとらない、産卵期の保護をきちんとやろうじゃないかということです。第3段階は水利調整をやります。農業用水団体とかいろんなところと水の分け合いをやろうということです。100年間水戦争をやってきたけれども、これに決着をつけるぞと。あと、三河湾、源流の森の保護へ進んでいくわけで、すべてが同時並行で進んでおります。現在水利調整の段階へ来ておりまして、これもまとめて「環境漁協宣言」の第2集なりにしていくんじゃないかと思っております。

水利調整の話が一番大きな課題になっておりますけれども、これはどういうことかという、ダムで徹底的に水をとってきますので、アユが上れるような水がない年が多いんです。我々としては、それはどうしても認めがたいので、春に向けてダムにアユが遡上できるだけの水量をためておいてくれ、また秋になると、川で生まれたアユのこどもが早く海に下らないといけないので、そのための水量をダムにためておいてくれという話をずっとやってきたわけでありまして、これは話がついて、ことしの春、正式に試運転のようなことをやりました。

私どもは、矢作川研究所からアユが河口に入ってきたとか、30km地点まで上ってきたというような通知をもらいますと、発電所を管理している中部電力といつ水を流したらいいかという事前協議をやります。電力会社の方はいつ幾日から流せるということで、事前協議が済むと、国土交通省へ申し込みます。国交省が農業団体とか工業用水団体と正式な協議をやってくれて、それじゃその水を使えということになります。ことしも二遍やってもらいまして、大きな効果がありました。

私どものことしの新しい発見は、アユというのは、かなりの水量を流さなければならな

いし、水温も余り低いと上らないというふうに思ってきましたけれども、アユの密度が高いと簡単に上ることがわかりました。ことしは、渇水の年で、水温もかなり低かったんですけれども、数日前現在で 600 万のアユが上がりました。これは私たちの今までの記憶にはないものです。これは、そういうダムの放流——朝日新聞が「お助け放流」というふうに名づけてくれましたけれども——のほかに、アユの密度が高くて簡単に上ってしまったということがあると思っております。

牛につられて善光寺という言葉がありますけれども、私どもはアユに引きずられるようにして流域の連携をしております。

以上です。(拍手)

○松本 ありがとうございます。

最後に、アユに引きずられて連携をしているというお話がありました。先日、新見さんには、漁協の専務さんと一緒に武庫川の河口から上流までじっくりと見ていただきました。武庫川っていい川だな、この川だったら、アユなんか復活させるのはわけないよというのがお二人の感想でした。

私たち流域委員会では、うっかりしていたことに、魚の問題について余り議論しなかった。委員会のメンバーにも、なぜか知らないけれども漁協が入っていなかったということに改めて気がついたわけですけれども、新見さんは、本職はプロフィールにあるように、矢作新報という週刊のローカル新聞の社主であり、記者です。週 1 回、月決め 1,260 円の新聞ですが、拝見したら、これは矢作川新聞じゃないのかな、あるいはアユ新聞かなど。

矢作川本流 120km の河口から 40km ぐらいが豊田市です。いわば中心都市ですが、豊田市の肝いりで矢作川研究所をつくって、調査会、川会議、川の学校と。その縁の下の力持ち、支えに漁協がしっかりと入っている。その漁協はアユにつれられて連携をやっていると。一番の根元はどうもアユにあったようで、魚がつくる流域連携という印象を私は深めました。後ほどアユにつられて連携しているという話をもう少し伺いたいと思います。ありがとうございます。

最後に、蔵治光一郎さんは、東京大学の愛知演習林の先生であります。武庫川流域委員会の主催で森林の保全という公開の講演会を行ったときにも、講師でおいでいただいたわけではありますが、森林だけではなくて、川にどのように住民がかかわり、いろんな連携をして川づくりを行っているかという非常に幅の広い総合的な研究者でもあられます。蔵治さんには、これまでの 3 人の話も踏まえて、研究者として流域連携についてどのように考

えておられるか、あるいは具体の実践課題等についてもご指摘をいただければありがたいと思います。

○蔵治 皆さんこんにちは。前に皆さんにお目にかかったときには、私は、今ご説明がありましたように、緑のダムの専門家ということで、緑のダムに否定的な立場をとられている先生との対決という形でしゃべらせていただいたんですが、きょうは全く違う立場でお話をさせていただきます。

私は、大学時代の専門は、森林水文学といいまして、森と水の関係について研究するところでしたので、もともと森の研究が専門でしたけれども、そこから川に入って行って、最近さらに海まで入っていくということで、森からスタートしましたけれども、総合的に流域を見ていくという立場の研究をどんどん進めているところです。その観点から、青の革命と水のガバナンスというプロジェクトも立ち上げまして、3年半ほどやってきているところです。

きょう、皆さんのお手元に幾つか資料を入れさせていただきました。忘れないうちにちょっと説明をさせていただくと、何枚かめくっていただきますと、非常に派手なチラシみたいなものがあると思います。「飛び出す人文・社会科学～津々浦々学びの座～」と書いてあるものですが、この派手なチラシが私どものプロジェクトでやろうとしている武庫川に関する総合的な治水のイベントであります。我々科学者、研究者と一般市民の方々、あるいは行政の方も含めて、対等にコミュニケーションしながら議論をしていこうという催しで、7月16日に宝塚市でやることになっております。次のページには、ことしの9月に行う第2回ため池シンポジウムというチラシも入れてあります。第1回ため池シンポジウムというのが、昨年11月に姫路の方で行われております。ご存じのように兵庫県というところは、日本一のため池王国でございまして、そこでシンポジウムがやられたんですが、それを愛知県にぜひ引き継がせていただこうということで、ことし9月に知多半島の方で企画しています。私どもが、流域を森林、ため池、川から海まで含めて考えていこうという流れの中で企画しているものであります。

きょう、私は、学術研究者の立場から、今までありましたような実践の事例について何らかの整理をするのが役割ということですが、自分としても実践活動に参加しているいろいろやってきております。といいますか、私の基本的な立場は、学問というものも実践の中にあると思っております。机の上、あるいは図書館の中にも学問はありますが、それとは別に、実際に自分が現場に足を運び、体を動かし、あるいはそこで実践している人た

ちと対等の立場でかかわるといふことから物を生み出していくしかないだろうと思っております。

ここのタイトルに「川は流域住民の鏡」と書かせていただきました。どういうことかといいますと、日本じゅう、いろんな川がございます。その川はいろいろな姿をしております。その川の姿はだれが決めているかという、決して河川管理者とか国土交通省ではないと思います。その流域に住んでおられる一人一人ではないか。というところから議論を始めなければいけないだろうと。ところが、残念なことに、川の流域に住んでいらっしゃる方はだれもそんなようなことは思っていない。そこをまず何とかしていきたいということが基本的な問題意識です。

きょうは、「川がむすぶ人と地域」というテーマのシンポジウムですが、流域連携という言葉を、それを表現します。私の理解では、流域連携というのはいろいろ歴史がありまして、非常に大ざっぱに言わせてもらいますと、1960年代から70年代にかけて、高度経済成長というのがあって、そのころから言われ始めてきたことだと思います。もちろん、その前、江戸時代、明治時代からそれに分類できるようなことはありましたけれども、近代的な流域連携というのは、例えば、高度経済成長に伴う開発、あるいは森林伐採、それに伴う水質汚濁、水量の減少といったことから、紛争状態になったりして、そこから上下流の交流が必要だということになってきたんだと思います。1980年代になりますと、実は、総合治水という言葉は、1977年の河川審議会の答申で既に使われている言葉です。1997年の河川法改正で初めて出てきたわけではなくて、その20年前に既にあったわけです。そこで、総合治水という観点からの流域連携ということが語られ始めた。あるいは、1977年には、三全総という国の開発計画の根本を決める計画の中に、総合治水、流域圏という考え方が入ってきております。90年代になりますと、まず多自然型川づくりとか近自然工法といった河川環境に注目する動きが出てきて、そこから、河川法改正の中に環境が取り入れられるというような動きがあった。また、いい川づくりというふうな運動が全国に広がり始めた。あるいは、森林と川の関係とか、海との関係というものが注目を浴びるようになったということです。最近になると、いろんな川の計画づくりで、例えば、流域委員会というものが設けられて、その中で、流域という言葉が使われるので、流域の連携ということが全国的に言われるようになってきた。こういうふうに整理できるだろうと思います。

言葉の使い方の話ですけれども、私は、総合治水というふうにここでも申しましたが、国の方では、総合治水という言葉の使い方がちょっと違います。総合治水というのは、1977

年の答申に書いてありまして、それを受けて彼らがやり始めたことが総合治水であると。それで彼らが何をやったかという、基本的には都市河川の問題、言ってみれば、矮小化して、非常に小さいスケールでの実践をいろいろやられました。これは大変成功をおさめたと私は思っておりますけれども、武庫川なり矢作川なりで語られている総合治水というのは、都市河川のレベルの話とは違って、武庫川であれ、矢作川であれ、流域の60%以上が森林に覆われているわけです。都市河川というのは、流域の60%が都市で覆われているようなところのことを言いますので、かなり違うだろうと。

国は、総合治水とは一応区別するということで、それは流域治水という言葉を使います。流域治水というのは、もう1つ使われ方があって、これまでの治水政策という国土交通省河川局がやられている治水は、基本的には基本高水というものを決めて、その基本高水をダムという貯留施設と河道の2つに配分するという治水哲学によって行われていました。ダムプラス河道の治水というものではいけないんじゃないかというアンチテーゼとして、流域治水という発想が出てきているという部分もあると思います。今まで全国的にいろいろな努力がされてきていますけれども、残念ながらここでは流域治水を完全に実行できていますというところまでは至っていない。そういう意味では、実践例なしと言うべきだろうと思います。

先に結論を言うてしまうことになりましてけれども、結論を言うてから、私はいろいろな例をお示ししたいと思いますが、まず一般的な留意点としてどんなことがあるかというのを私なりに考えてみました。

(スライド)

これは、今3人のお話を伺いながら自分で書いてお見せしているんですけども、流域連携と言っても漠然としていますし、流域あるいは河川と言っても、治水なり、利水なり、環境なり、生き物なり、文化なりというものを含めていくと、無数にテーマがあります。その無数のテーマの中で、目的が何かとか、目標が何かということが漠然としている、あるいはどれもこれも実現したいということで並列にしておいても先に進まないの、具体的に優先順位を決めていかなければいけないだろうと。優先順位は、別に全員共通の優先順位である必要はなくて、それぞれの団体がそれぞれ好きなように優先順位をつけてもらえばいいと思います。

また、非常に細かいテーマを設定しますと、細かくなればなるほど、人の間でいろんな価値観があつて対立する。例えば、この川はどういう状態がいいのかといったときに、こ

ういう状態がいいという人もいれば、ああいう状態がいいという人もいて、好き嫌いの問題になると合意形成が難しくなります。連携というからには、大ざっぱな方向性で、小異を捨てて大同につくというような発想が必要だろうと思います。

次が結構大事ですけれども、住民あるいは市民の運動、活動、イベントというものは、基本的には自発的にやるべきものである。最近ありがちなのは、行政がおぜん立てしてやるとか、行政にいろいろ助けをお願いするということですが、行政は永久に支援できるわけではない。行政に頼るスタイルというのは、行政が何かしなくなれば、それ以上続かない。非常に依存体質の強いものになってしまいます。やはり自立した自発的な運動、活動というものが一番強い。これをやらないと持続的なものにはならないということです。

逆に、行政の側に言わなければいけないことは、行政が余り表に出過ぎると、住民、市民というのはそれに頼ってしまう体質があります。今、新見さんが漁協は裏方に徹しているとおっしゃいましたが、行政はとにかく裏方に徹していただくということが大事です。

もう1つは、市民と行政の違いとして、市民がまず組織をつくるとか、制度をつくるとか、そういう発想をしない方がいいと思います。今の法律がどうだとか、組織がどうだとかいうことは棚上げしておいて、とりあえずおもしろそうだからやってみようという発想で進めていくべきだろうと。組織とか制度というのは、後から自動的についてくるのではないかと思います。実践がないのに、何らかのお金が降ってくるとか、組織ができるということはありません。逆に、行政というのは、法律に基づいて仕事をしている立場ですから、法律がないのに、何かやれというわけにもいかないのです。まずは行政がきちっと条例をつくるとか、組織をつくるというところから固めていっていただく方がいい。

その際、私たちが忘れてはいけないのは、流域委員会というのは河川行政の枠組みでやられていますし、流域連携ということも出てきていますが、実は河川法という法律をどこまで読んでも、流域という言葉は一回も出てこないんです。河川行政なのに、流域委員会という名前をつけていること自体が非常におかしなことで、流域というのは河川法の範疇、あるいは河川行政の範疇から明らかにはみ出している。そのことは、例えば、流域連携をやるといったとき、行政としてパートナーが一体どこなのかというときに忘れていないで考えていただきたい。

今から矢作川の実践の例と九州の球磨川・不知火海という流域圏の事例を簡単にご説明いたします。矢作川については新見さんからありましたので、私の方は補足的になると思いますが、私は、森林の立場から矢作川で現在少し活動していますので、そこを紹介させ

ていただきます。

(スライド)

皆さんは、武庫川のことはよくご存じだと思いますけれども、矢作川のことはご存じないと思いますので、ごく簡単に比較しますと、川の長さは、65km 対 117km、面積は 540km² 対 1,830km² ぐらい、まあ半分か、3分の1 ぐらいのサイズであると。流域人口を見ますと、武庫川の流域人口はとんでもなく多いんですけれども、矢作川も結構多いということがわかっていただけだと思います。にもかかわらず、武庫川でも矢作川でも森林の割合が非常に高い。そういう意味で共通点が多いように思います。

それから、ダムについては、武庫川では、本流にはダムはありませんけれども、現在ダム計画があると。矢作川は、先ほどもありましたように本流はダムだらけであると。ただ、ここで新しいダム計画が2つございまして、1つが河口堰計画、1つは上矢作ダム計画です。河口堰計画の方は、結局、水需要、利水の方の必要性がなくなったということで、中止になっております。残るは、最上流に計画されている上矢作ダム計画ということです。

両方とも流域委員会がございます。流域委員会の比較というのもちょっとやってみました。武庫川の流域委員会は、ご存じのように2004年3月から始まりまして、229回いろいろな会議を開催しています。矢作川は、これまで7回開催しております。最後に開催されたのは2006年7月ですので、もう1年間開催していない。極端な差がございます。傍聴者発言については、武庫川ではオーケーということになっています。矢作川では認められていません。現在の進行状況は、武庫川では提言書を既に出されていますけれども、矢作川では、現在河川整備基本方針が国土交通省から示されて、河川整備計画をつくるところで、河川管理者側からの原案もまだ提示できていないという状況にあります。

基本高水とかの話は飛ばしますけれども、ダム計画の違いは、武庫川に計画されていますのは、中流の溪谷のところに重力式のレクリエーションの多目的穴あきダムということになっておりまして、高さ73m、長さ160mであると。洪水調節に有効貯水容量は950万m³ ということで、300億円となっております。最新の情報として正しいかどうかはわかりませんが、私の得た情報ではこうなっています。矢作川の方は、ロックフィル式多目的ダム、堤高150m、堤頂長417m、大体1,000億円という予算ですけれども、恐らくこれを上回るだろうということになっているようです。

違いがあると思うところは、武庫川ではとても住民活動が活発だと思いますが、矢作川では、住民も活発なんですけれども、農業とか漁業とか発電とかをやられている方、ある

いは研究者が非常に活発だと。また、武庫川では、この流域委員会も含めて、公開の場での議論を通じて深めてきておりますけれども、矢作川というところは、そういうスタイルではなくて、権力を持っている方々が密室でお話し合いをされておまして、その中でいろんな妥協が行われて、合意形成が行われると。こういう言い方をすると、新見さんの気にさわってしまったら申しわけないんですけれども、(笑) わかりやすく言うと、こんなように理解していただきたい。これを大ざっぱに、乱暴に整理すると、こちらは21世紀欧米型システムで、こちらは18世紀江戸型システムではないかと思っています。

武庫川では、流域委員会の回数でわかるように、非常に時間を費やされていますが、実質はこれからだろうと。矢作川では、形式ではなくて、実質を重視していますので、例えば、電力会社がお助け放流をするという実利を漁業協同組合が得ることが進むわけであります。

私が今から紹介する森の健康診断というのも、実質を重視した取り組みだと考えていただければと思います。

森林との関係で矢作川ではどんなことがあったか。森林以外の川の部分でも、矢作川というのは、1960年代から日本でほとんど最先端を走ってきていたと思います。矢作川では、もともとの歴史は明治時代にさかのぼるわけです。全国の農業用水の先駆けとなる農業用水を開削して、それに伴って明治用水、頭首工という本流を横断するダムをつくってしまったところからコンフリクトがスタートしている。安城農林高等学校の役割というのが非常に大事です。また、明治用水というのは、上流の森林に対して非常に理解がありまして、1908年の段階で水源涵養林をつくっていたということがあります。

例えば、91年に下流の安城市と上流の長野県の根羽村というところが矢作川水源の森分収育林契約というのを結んだ。これは、森林法に新しく入れた森林整備協定というものの全国第1号であったということです。95年には、豊田市で、今兵庫県でも緑税とかいうのがあると思いますけれども、あれと同じ仕組みで、このときは水道料金1トン1円相当額を積み立てるという方式の水道水源保全基金というのをつくりました。これも全国初だったということです。

そういう最先端を走ってきましたが、そこで私どもの地域を襲ったのが東海豪雨という大災害でした。この大災害をきっかけに、森の健康診断というものをやり始めました。2004年にボランティア団体の協議会である矢森協という組織ができて、この組織が2005年6月に森の健康診断というのをやりまして、これをずっと続けてきているということになりました。

す。

この健康診断は、矢森協というボランティア団体の協議会と研究者グループが実行委員会を形成して、流域を対象として、上下流交流・流域連携を目指して10年間継続するという事でやっています。これまで3回やってきまして、延べ787人で、226地点を調べてきました。

東海豪雨の災害というのは、非常に大きい災害でした。もちろん、既往最大流量を更新していますけれども、上流の山がこういう形で崩れました。こういうふうになると、当然流木が川に流れ込んできて、その流木が矢作ダムというダムにたまって、それが毎年たまる量の50倍の量であったと。実際、この森林の中を調査してみると、非常に荒れて放置されている森林が多かったということです。

我々は、よい山というのは、木の密度が低くて、中が明るくて、下に草が生えていて、土壌表面が保護されて、水が浸透するような山だと。悪い山というのは、木が間伐されずに密度が高過ぎて、真っ暗で、下に草が生えていなくて、土壌の表面がむき出しになって、水が余り浸透しない山ということで、この流域圏全体の森林を対象として活動を始めたということです。

この衛星写真にありますように、流域の3分の2を占める森林を2kmのメッシュに区切りまして、そこで調査をやっています。調査の内容は、植生の調査と込みぐあいの調査ということで、詳しいことは省略しますが、調査をするときに使う道具は、全部100円ショップで購入可能なものでそろえると。こういうふうになると全国どこでもまねできるんじゃないかということでやっています。

最近やっているのは、木の高さを測る方法はなかなか難しいので、100円ショップで材料だけ買って来て何かできないかということで、原価二、三百円で簡単に木の高さがはかれるものを豊田市の職員の方が趣味で開発しました。

私どもはこのイベントを今までやってきて、これが集合写真の羅列です。これが最新、ことし6月のものです。今写真を見せたもので、3年間で700人ぐらいの人が参加して、実際に山の中でやる活動はこんなようなことです。

いろんな人がかかわってくださいました。森林ボランティアのリーダーの方とか、一般参加者とか、研究者とか、自然観察が趣味の方とか、あるいは森林組合とか漁協さんとかは裏でサポートしていただく、あるいは行政も完全に裏でサポートしていただくという体制で、情報発信してきているということです。

これには多面的な意義や成果がありました。データをとるというだけではなくて、森林の所有者とか組合を応援していくとか、政策提言をしていくとか、参加する人がとにかく歩いて楽しむとか、環境教育にもなるとか、上下流交流・流域連携になるということを目指しているわけですが、その中でどんなことがわかってきたかという、これは、楽しくて、少しためになるというのがキーワードだと。1日だけ研究者になったような気分になれるというので、プチ研究者、プチボランティアというようなことを言っています。それから、自己満足は当然として、自己満足の積み重ねで、トータルとして社会が満足できるようになるというので、社会満足と。あるいは、皆さんそれぞれ本業があるけれども、本業とは違うことをやってみようというので、自分たちの分野を踏み出しているということで、踏み出しと。山の中で、皆さんで初めましてと会うので、異業種交流であり、森の合コンである。そういったことでやっています。

新聞とかにも随分取り上げていただきまして、本にもなりました。矢作川だけではなくて、伊勢湾に流れ込む10個の一級河川がありますが、そこに広がってきました。先ほど吉村さんがお話しになった土岐川、庄内川という川にもすぐ広がって、庄内川の源流のところで、2005年にこういう健康診断をやりました。このときは、庄内川河川事務所という河川管理者から全面的な支援をいただいてやっています、翌年も引き続きやっていますところですよ。

今いろんなデータが得られています。根羽、恵那、豊田と書いてあるのは、長野県の根羽村、岐阜県の恵那市、愛知県の豊田市です。矢作川の源流部というのは3県にまたがっているわけです。私どもは3県に満遍なく出かけていきますので、それぞれの県でどういう種類の木が植えてあるかというのが明白にデータとして出てきます。根羽村というのは、スギを伝統的に植えてきている。恵那市というのは、東濃ヒノキというブランドがあって、ヒノキばかり植えてきているということがわかってくる。

これは込みぐあいといって、赤でかいてある部分が悪い状態の森林ということですが、これで見ると、長野県根羽村は、どの指標をとっても、ほかと比べればよくて、愛知県と岐阜県はかなり悪い状態だということがデータとして整理できてきます。

私どもがよく受ける誤解として、こういうようなものがあるというのが最近わかってきました。何かというと、科学的に重要な精度が確保されているというふうに誤解されます。専門家が市民より上の立場でかかわり、市民を労働力として使っているというふうに誤解されます。効率よくやらないといけないというふうに誤解されます。何か報酬なり実費が

もらえると誤解されることがあります。これは全部誤解で、私どもは全部満たしておりません。あえてこういうことを避けています。

例えば、科学的に重要な精度が確保されている誤解とは何かというと、私どもがやっているのは楽しみであって、科学的厳密性を追い求めているわけではありません。もちろん、精度が高い方がいいに決まっているんですけども、精度を高めようとする、ある段階で苦しみにってしまうので、厳密性はそれで十分、楽しみが第一というふうに優先順位を決めるということをしています。精度が十分かと言われたら、弱いところがあるというのは仕方ありません。専門家が市民より上の立場というのは、専門家はこういう活動に必ず必要ですが、専門家がどういう方で、どういうふうにかかわるかというのは非常に難しいことです。そこがうまくいかないと、なかなかうまくいかないとことがわかってきて、専門家の人材となるのに必要な条件が4つぐらいあって、そういう条件を満たす専門家を探すのは非常に難しいということがわかってきました。効率よくやらないといけないという誤解は、私たちは、高度経済成長期の遺伝子を引きずっているところがあって、何でもかんでもみんなノルマだと思って、短時間に素早く終わらせようという発想にどうしてもなります。それは私どもは絶対にしない。だらだらやった人間の方が偉いんだというような哲学をここで広めていて、それを徹底してやっていることで、楽しみをますます優先しよう。

それから、作業対価として報酬がもらえるというのは、行政に依存するという同じなんですけれども、楽しいから自発的にやり始めたという発想がどこかで切りかわってしまって、一生懸命やっているのにどうして自腹でガソリン代も払わなければいけないんだというふうになくなってしまいます。そういうのは絶対しないと。私どもは、全員が自腹で集合場所へ来て、参加費 500 円を払う。それでもおもしろいから来るんだというイベントにしなければだめなんだということで、やっております。

別の川の事例を紹介しますが、もう1つは、九州の球磨川という川を対象にしてやっています。ご存じのように、球磨川というのは、日本で最もひどいダムコンフリクトである川辺川ダム問題というのを抱えている流域です。どうしてこういう流域でこういうことをやり始めたかということ、ダムができるかできないかということは、実はそれほど重要なことではありません。ダムができようができまいが、やらないきゃいけないことが今いっぱいあって、結構緊急だと思います。今ダムができるかできないかわからないから、とりあえずすべてをペンディングにしておくという態度をとっていると、どんどん手おくれになっ

ていくわけです。

例えば、先ほど話に出た庄内川なんかは、もうダムのコフプリクトはないから、皆さんも平和に流域連携をやりましょうとどんどん進んでいくわけです。ところが、ダムのコフプリクトがあるという理由だけで、それをやめてしまうと、そこだけどんどん立ちおくれしていくということが、球磨川というところでも起こっておりまして、それに対して地元市民が危機感を持った。ダムができるできないに関係なく、大事なことをやっていかなければいけないというので、私どもに打診がありまして、学会をつくるという作業をしました。

武庫川でも学会をつくるというような提言がありますので、参考までに出していますけれども、この学会はおもしろい学会で、基本的には市民が主導でつくっています。会長とか副会長は一応偉い先生方に入っていますが、例えば、総務委員長のつるさんという人は薬剤師なんですけれども、この人が問題提起をしてやり始めた。会計担当者の肩書はイグサ農家となっています。監事をやられている方は、1人は地元の出版社の社長さんで、人吉というところでローカル新聞みたいなものをつくられている方です。もう1人の沢畑さんという監事は、水俣の森林をやっている施設の館長さんです。

皆さんのお手元にもお配りしたと思いますけれども、私どもはこういう学会誌をつくったりしています。ここでは範囲を球磨川という川の流域だけではなくて、海も含めようということです。球磨川の流域の行き着く先は、不知火海あるいは八代海という閉鎖性水域なんです。天草諸島があつて、外海との入れかわりが少ないような形になっているので、ここで流域圏ということをやっているところです。

これが私どもの研究発表会で、設立趣意書として、私どもは学融合的な研究及び実践的取り組みを研究者と地域住民が連携しつつ行うことを重視しようと。そのトピックスとして、自然環境だけではなくて、森・川・海のつながりとか地域社会との関連を重視した人文・社会学的研究、あるいは市民との交流の促進、子供たちへの流域文化の継承というのを挙げているということです。

ちょっと長くなって申しわけなかったんですけども、以上で終わります。(拍手)

○松本 ありがとうございます。大変貴重な指摘をいただきました。森の健康診断というのは、非常に専門的な話かと思っていたら、要するにイベント化して楽しみながらいろんな人がかかわって、気がついたら、既存のデータとしてはないことがいつの間にか整ってくるというマジックみたいな話に聞こえましたが、そういう効果をもたらすようになるというお話を伺えたのではないかと思います。ありがとうございます。

4人の方のお話を伺っただけで、きょうはもうポケットがいっぱいになった感じで、このまま終わってもいいなと思っているんですが、そうもいかなくて、武庫川にどうやって取り組むかということは何らかの手がかりを得たいというのがきょうの趣旨でございます。4人の方々のお話は、いずれも大変示唆に富み、我々も既に着手している、あるいはそれを視野に置いていることが多々ございますけれども、いざやっていくとなるとどうした問題があるんだろうかというところはまだ雲をつかむような面がございます。

そこで、後の議論をより具体的にするために、私たち自身が流域委員会のこれまでの議論の中で感じている、武庫川で流域連携を進めていくときの壁というのはどんなものがあるのだろうかということ、ここで少しご紹介したいと思います。

きょうは、流域委員24名のうち、私も含めて19名が参加しておりますが、その中で、流域連携の問題に大変お詳しいというか、積極的な発言をずっとしてきていただいた中川委員に、フロアから、武庫川ではどんな課題を抱えているのかということ、簡潔にコメントを出していただきたいと思います。

○中川 委員の中川でございます。ふだん委員会では治水の議論をぎしぎしとやらせていただいておりますけれども、きのうは、機会を得まして、武庫川漁業協同組合さんのウナギの放流をお手伝いしてまいりました。そのほんの一部を向こうに連れてきましたので、後で見てあげてください。

今申し上げたようなウナギの放流事業とかのイベントは、武庫川でどのくらい盛んかという、盛んだというありがたい評価を先ほど蔵治先生からいただいたんですが、全県で見ますと決して盛んな川ではない。西の方から言わせると、武庫川はダムの問題があるからだとずばりと言われてしまうぐらい非常に大きな問題がある。武庫川に普通の人が素直な気持ちですっと入っていけない、かかわれない、かかわりにくいのは、そこにダムの問題があって、それについてあなたどう思うのというのを最初に聞かれてしまうかもしれない、あるいは実際聞かれてしまう。それが一つの踏み絵になってしまっているというのが、実際現場で私自身も感じていますし、委員会でもかなり共有した問題だと思います。

ダムコンフリクトのある川というのは、武庫川だけではなくて、全国どこの川でもそういう現象は起こっていますが、武庫川の場合にはこの問題はすごく大きな問題であるということが言えると思います。

もう1つは、ダムの発端にもなっている治水へのニーズということに対して、当然治水へのニーズがあるから、ダムという計画が出てくるんですけれども、治水へのニーズ、つ

まり治水への危機感がどこまでどの程度共有できているのかというところがかなりあやふやなのではないか。だれとだれの間での共有かというところ、いろんな切り口がある。下流の中、つまり氾濫域の中での共有というのもあるでしょうし、下流と上流との共有もありますし、行政と市民との間の共有というのもあると思います。

ほかにもたくさん問題がありますが、きょうは時間がございませんので、武庫川が抱えている大きな問題点をこの2つだけ挙げておきたいと思います。もちろん、きょうのシンポジウムはその意図で開催されているんですけども、治水の話は当然大事、利水も非常に大事、川の環境も大事、もっと言えば、人が毎日なじんでいる景観も大事かもしれない。そういうところの利害調整が突きつけられているのが武庫川だと思います。新しいルールづくりといいますか、先ほど蔵治先生の方から江戸型システムと近代的なシステムの近代的なというご評価をいただいたんですが、案外江戸型のシステムも隠れたところで残っているのかもしれない。でも、とにかく、いろんな観点での利害調整、新しい秩序づくりを武庫川でやっていかないといけないのではないかとというのが今武庫川が直面している、流域委員会が認識している課題というふうに申し上げられると思います。

ですので、残りの時間ではそのあたりについて議論を深めていただければありがたいと思って、フロアからのコメントとさせていただきます。よろしく願いいたします。(拍手)
○松本 ありがとうございます。時間的なことを気にして、短かったのも、ご理解いただけたかどうかわかりませんが、後の議論の中で消化していきたいと思います。

冒頭に申し上げましたように、これまでのご発言、ご提起について質問があれば、お手元のアンケート用紙に書いて、手を挙げてもらったら、事務局がいただきに上がりますのでよろしく願いします。

これまでのお話、武庫川の場合にダムの問題が大きなネックになっているという話でしたが、蔵治さんからは、ダムがあるからできへんといって手をこまねいていたらどうしようもないんだというご提起がありました。時間のかげんでかなりはしょっていただいたんですけども、まず、ダムがあるからという部分について、吉村さんはどのような見方をされていますか。

○吉村 川辺川ダムとか吉野川とかは全国紙に出ているので、考え方をめぐって地域に物すごいしこりがあります。武庫川はどのくらいなのかはよくわからないんですが、そういう課題はあるけれども、川は、何回も言っているんですが、体を運ぶというのがすごく大事です。賛成だろうが、反対だろうが、まあ見に行きましょうというグループが宝塚にも

いて、篠山にもいてとか、1つの団体なりが呼びかける必要もないと思うんですが、武庫川を1年間かけて見て歩くという行為、行ってみようかということができればいいなという気がします。

いずれにしても、川に行かないとわからない話なのに、頭だけで議論します。先ほど松本さんがお話をしているときに後ろにスライドが出ましたが、あれを見ていて、総合治水の前にやるのがいっぱいあるんじゃないのという気がしたんです。あれだと、川への負担が物すごく大きくなっていくというか、浸水被害を受ける人がいっぱいふえるような土地利用というか、総合治水でためようとしているんですけども、ためる前の話が物すごくあると。農地の中にいろんな施設、公共的な施設もあったみたいですし、住宅地も出てきていますし、上流の方なんかは、山すその少し地形の高いところに道があって、山を背にして住宅地が入っていましたよね。旧来の住まい方があって、秩序があるんですけども、そんなのは全くお構いなしでやっていますから、そんなことも含めて考えるということが本当は大事だと。ためる必要はあるんですけども、ためる以前の問題をそのままにしておいて、ためるといっても、たまるわけがない。効果が出るわけがない。効果を出そうとしてやっているところから、足元を崩すことがいっぱい起きている。だけど、そんなことを気づくのも、やっぱり川へ行かないとわからないんじゃないですか。

ああいう航空写真をこういう場所を見て、私なんかはそういう印象を持ったんですけども、やっぱり知ることがすごく大事で、ダムに賛成の人も反対の人も無関心の人も武庫川に行きましょうみたいなことができればいいなと。そこから発見することが大きいという気がしました。

○松本 現場を見ること、今ご指摘にあったように、どうためるのかというよりも、とにかく土地利用がくちやくちゃじゃないかというご指摘については、どきっとしているんですけども、そういうご提起でした。

先ほど蔵治さんの最後のところで、時間がなくて随分はしょられたと思うんですが、球磨川で、武庫川よりももっと激しいダムのコンフリクトがあるという中で、学会ということでしたけれども、そのあたり、どうやって乗り切ったか、ダムにかかわらず動くところ、具体的にどこに突破口を見つけられたかという話をもうちょっと補足してもらえませんか。

○蔵治 今中川さんからお話のあった状況と同じ状況があって、熊本県には、球磨川以外にも緑川とか白川とか大きい川があるわけですけども、そういう川では、総合治水なり

流域連携ということがどんどん先行して進むんですね。それはダムコンフリクトが解決した後だからです。そこで明らかに差がついてくるので、そういうのを均等に見ている人にとっては、このままだと球磨川はどんどん立ちおくれるということが明白になってしまうわけです。

もう1つは、ダム問題はいずれは決着するだろうというのが当然あって、それがいつかわからないんだけど、決着したら、どっちに転んでも、そこから何かやらなければいけなくなる。そのときでは既に遅いということが地域で実際に川を見ている人たちには見えな気がします。

もう1つは、研究者の方にも問題がありまして、球磨川は、コンフリクトがあるということもありますけれども、自然環境が物すごくいい川で、発電ダムを1個撤去しようとしているということでも全国で初なので、いろんな研究者の方が、例えば関西地方からもたくさん行ったりします。ただ、皆さんばらばらに研究しに来られて、勝手に自分の研究のデータをとって帰って行って、何も地元に残さないというんですね。地元の人たちは、研究者が来ると、何か地元の役に立つかもしれないと思って、いろいろお世話をしたり手配をしたり助けてあげるんですが、結局、データだけとって帰っていっちゃうと。もう1つは、来る研究者は、それぞれの研究分野がばらばらで、同じ大学であっても、例えばこの間京都大学の先生が来ていましたよと言っても、その人は全然知らない。要するに、研究者の横のつながりが全くないということが地元の人にばれてしまったわけです。それを地元の人が冷静に考えたら、これではまずいと。せっかく研究者が来るんだったら、研究した成果を残してもらわなきゃいけないし、それが地域社会の将来づくりに役に立ってもらわなきゃいけない。それと同時に、研究者も、横の連絡をちゃんととって、似たような調査を繰り返しやるとかむだなことはやらずに、効率よく総合的に研究を進めてもらわなければいけないということだったんですね。

流域圏学会という発想は、これが最初ではありませんで、一番最初は、高知県の四万十川で、四万十流域圏学会というのが今から6年前に立ち上がっています。それが全国初だと思います。四万十流域圏学会というのは、住民が自主的に立ち上げたわけではなくて、高知県庁の主導で行われました。これは、高知県の戦略として、当時、四万十川の清流というものを全国にアピールしたいという行政的な意図の中から発想したものです。今はもう高知県の手を離れて、高知県の研究者だけで運営がされています。今全国ではその2つの事例があると思います。

○松本 学会を立ち上げるというのは、我々も武庫川学会というふうに提案をしています。武庫川学会をどこがコアになってやるのかというところが今課題になっておりますが、武庫川流域には、例えば、流域委員会の議論の中でも重要な役割を果たしていただいた人と自然の博物館というのがあります。研究機関で、ミュージアムでもあるわけですが、そうしたところとどのように連携しながら体制をつくっていくかというのが課題になっているということだと思います。

先ほど新見さんが、連携は魚が連れていってくれるよ、魚についていっていたら大体連携ができちゃうよというふうな話を最後の方でぼろっと言われました。確かに、アユというのは回遊魚で、海で育って、川を遡上していく。今矢作川では500万匹という空前の遡上が続いているようですが。ところが、私たち武庫川の場合に、流域委員会に漁業者、漁業組合が入っていないということに改めて気がついたんです。もう1つ、議論の中で、魚についての議論が十分行われていない。というより、ほとんどやられていない。これはなぜかというところをこの間から新見さんのご指摘を受けて考えているんですが、武庫川では魚はあかんと違うかというふうなあきらめがひょっとしたらあったかもわからない。そこのところをもう一度巻き直さないといかんと違うかというのを、新見さんのお話を聞きながら感じていました。魚をもっと大事にして、魚を生かしていけば何とかなるよということを、武庫川の場合にどうやっていったらいいのかということについて、何かいいヒント、ご提案はございませんか。

○新見 先ほど会場の外で待っているときに、武庫川漁協の組合長さんに偶然お会いしたんですけれども、委員会の委員になっていらっしゃらないんですかと言ったら、お呼びもなかったよということをおられました。私、14日に皆さんに案内していただいて武庫川を見たんですが、いい川の割に生物の存在感の少ない川だなと。特に魚は余りいないなという感じを受けました。上流の方にいい魚道をつけておられて、横からのぞく窓ができておりましたので、もうちょっと見えてもいいなと思いましたがけれども、余り見えなかった。魚の移動時期はまだ終わっていないので、今の時期なら魚道を通して移動があってもいいんじゃないかと思えますけれども。

先ほどもちょっと申しましたように、魚というのは密度がある程度高くないと移動する必要性を感じないようです。何でもかんでも上に上っていくということではなくて、密度が高くなって、自分がすみづらいと上へ上がっていくというような性質があるようです。そういう点では、あれだけのいい魚道を上らないというのは密度が余りないなという

ふうに思っております。

このあたりから海までがビルの谷間の平坦な川で、そこから海へ入りますね。山の峡谷部へ入って、その上が山間地、農村地帯の平坦部に入るわけですがけれども、私はこういう想像をしております。武庫川漁協の組合長さんはそうじゃないぞというふうに言われましたが、海、それから、下流の平坦な部分—砂の川で、今はビルの間にありますが、これは武庫川全体の魚を養ってきたゆりかごのような地域であったと思います。海と川は潮どめ堰で1つ切れている。転倒堰で、洪水のときにはつながるわけでありましてけれども、平常は切れている。それと、アユは下流部の砂河川のところで卵を産みますので、その部分が非常に大事なわけでありましてけれども、ちょっと乱暴な河床掘削をやられておるなというふうな感じを受けました。

総合治水の中で、河床掘削というのは避けて通れぬわけでありましてけれども、やり方はいろいろあるんじゃないか。もし武庫川流域委員会の皆さんが魚をもう少し勉強しておられると、ああいうやり方をやらずに、部分、部分に、こちらを完成させて、しばらく時間を置いて隣をやっていくというようなやり方があると思うんですけれども、何せ一遍に早くやりたいというのが土木の方の鉄則であるようです。そのところを避けて、魚の習性に合ったように総合治水を進められると、この川なら十分にアユは復活するんじゃないか。本川にダムがいっぱいある難しい川じゃありませんので、うまくいくんじゃないかと思っております。魚の研究をやる、矢作川でいう天然アユ調査会みたいな住民団体ができると、ここは間違っておるぞとか、ここはこういうふうにやった方がいいというような意見がいっぱい出てくると思います。

○松本 淡水魚のことについては、横山さんは淡水魚の専門家でもあられるんですけれども、千種川の流域委員会では、横山さんも委員で、魚の話について随分と議論がはずんだように記憶しておりますが、この問題について横山さんの方から何かご提案、ご意見はございませんか。

○横山 魚というのは、そこにずっと定住しているわけではなくて、アユは上がっていきすし、ウナギも、今話が出ましたが、海と川を行き来する。そういうのをずっとたどっていくことで、川の中で何が問題になっているかというのが見えてくると思います。

実際には、川の問題だけではなくて、川に付随する水路、昔だったら氾濫原で産卵が行われます。魚は、とにかく産卵できる場所がなくなったら絶滅するわけです。現在の河川は、河川敷がみんな高水敷になって、水がひたひたになるような氾濫原、湿地みたいなも

のではないです。以前は、そのかわりに、ちょうど今ごろは、水田、または川から水田につながっている水路が氾濫原になって、ナマズが産卵したりフナが産卵したり、里山じゃないですけども、里川というか、産卵場所になっていたと思うんです。ところが、圃場整備が行われることによって、それが隔絶されてしまって、淡水魚は激減しています。これは武庫川だけではなくて、千種川もそうです。

川の連続性や周辺の水路、河合先生の話にもありましたように、林の中をちょろちょろ流れているところにも、ナガレホトケドジョウというような魚が生息しています。今まで人間が知らなかっただけです。人間の血管に例えれば、武庫川が大動脈とか太い血管であれば、支川とか水路が血管の枝分かれしたものであったり毛細血管であったりと。そういうふうな視点で水を見ていかなければ、淡水魚だけではなく、水性生物をふやそうといったことは成功しないと思います。

武庫川の場合には都市が広がっていますので非常に難しいとは思いますが、今言ったように、産卵場所を確保してやれば、自分たちがすめる場所は魚の方が探します。人間が何かしてやるんじゃないで、人間がそういう配慮をしてやること、できることからやっていく。それだけではなくて、それに興味を持つような人を育てる。それを教えられる僕らの年代が生きている10年、20年の間に伝えないと、本当に時間がないと思いますので、魚を武庫川を考える一つの切り口にしたらどうかと思います。

○松本 もう1つ、先ほど武庫川流域委員会の中川委員から投げかけられたのは、危機感の共有ということです。治水にしろ、川を何とかしなければという危機感が流域でひとしく共有されているかどうか、その難しさが指摘されました。この辺について、まず川の現場を見に行くというのはあろうかと思いますが、例えば、先ほど吉村さんからご指摘があったように、土地利用は余りにもひどいじゃないのと。そこに危機感を持っていくために、現場に行くことなんでしょうけれども、例えば、下流の氾濫域の流域住民同士での危機感の共有とか、上下流の中での川の現状についての危機感の共有とか、行政と市民が同じ課題を危機感として共有していくというふうなプロセスについて、何かご提案があればお願いしたいんですが。

○吉村 災害の場合は、直面しないとなかなか真剣にならないということがありますし、被害に遭うところと遭わないところがそもそも違うということもあるので、そこをうまく共有するといっても、なかなか難しいという気がしないでもないんですが、災害の履歴をみんなで掘り起こしていくという作業がどうしても必要だと思います。先ほど河合先生が

おっしゃったように、日本の美しい川はもうなくなったみたいな話をしていますけれども、私も河川の技術者ですが、今の計画というのは流量で決めます。流量がここで不足するところからスタートしていく。河川改修もダムもそうです。

しかし、もともとの川というのは、川幅も広がったり狭かったり、周辺が高かったり低かったり、いろんな場所をめぐりながら来て、それぞれの場所で少しずつあふれながらとか、非常に狭くても、周辺の地形が溪谷のようなところでは流速が速くなって、水位も上がるけれども何でもないとか、いろんな調整の機能というものがあつた。それが、河川の改修によってバランスが相当崩れてきているというところがあります。科学的というか、流量計算上はそういうことになっているんだけど、例えば、過去の被害が多かったところでは水位がどういうふうに上がったとか、地形と水害の履歴というものを整理する作業をやっていく必要があると思います。

この間も、多自然型川づくりの相談があつて、ある県の川を見に行きましたけれども、流量計算上ここが不足しているというところから話をしているんですが、そこは霞堤になっているんですね。農家の住宅は高い位置にあつて、田んぼがだんだん下がってきて、川沿いの一番低いところが霞堤になっている。流量計算上足りないと言っているんだけど、ここの田んぼに水がどういう頻度で上がっているかを調べましたかと言うと、コンサルタントも役所の人も調べていないわけです。そういうことは地域の農家の方に聞けばわかるし、地形的に見ると、上がったも、引いたらーまあ収穫の時期とかいろんなことがありますけれども。被害でも、どういうものだったかということ調べるのが重要で、科学的な計算にそういうものは載ってこないんですね。だけど、実態としてはそういうことがいっぱいあつて、そういうことを調べつつ、計算上出てくることとかを融合して、連続堤にするんじゃなくて、拡幅するんじゃなくて、霞堤の仕組みを残しつつ、冠水頻度を下げるとか、いろんな方法論があり得ると思うんですね。

多自然型川づくりというのも、河川改修上はこうなんだけれども、いいところを残しつつ、こういうふうに川を整備するとみんなが来てくれるいい空間になるとか、改修計画をちょっと変えてとか、そういうことなんですね。治水計画も同じだと思います。

だから、履歴をきちっと調べる。大きく見るには、米軍の戦後の航空写真とかで比較するだけでわかることがありますけれども、地域の人たちから聞き出していくとか、市町村の消防署が結構浸水被害を記録していますね。いろんなことを調べていくということが大事だと思います。そういうことが不足して、計算とかそういうことになっているような気

がします。そういうことを調べていく過程で、土地がこうなったらここは危ないんだとか、知る機会があると思います。

○松本 河川の治水というのは、災害がないと遅々として進まない。治水対策は、災害が起きると一挙に進むというケースが多いんですが、住民が川に関心を持って、自分たちの長期的な川づくりをしようという流域連携にとっては、災害というのはプラスに働いているのかどうなのか。先ほどの新見さんの話では、10年間夢のような流域連携の時代があったのに、あとはぼろぼろぼろという話でしたけれども、10年少したったころに東海豪雨があったんですね。その後は流域連携がうまく進んでいるんですか。

○新見 災害を通じて何か変わったかという、別段変わっていないですけどね。恐ろしいことが起きるなということがあっただけで、それが流域連携につながったかどうか。決壊はしなかったですけども、矢作川の市街地の堤防を洪水が乗り越えましたから、上流も大切にしないとえらいことになるぞというところまではいったのかもしれないね。

○松本 千種川も2004年に大きな被害を受けました。清流づくり委員会が立ち上がってしばらくのときでしたけれども、横山さん、その辺はどうでしょうか。

○横山 うちの村が全部つかりまして、その後、23号で豊岡市がつかって、テレビで有名になりまして、そのころ必死に復旧作業をしていたところで、何でうちの村にはだれも助けに来てくれへんのやろう、テレビもいっつも来えへんなど。円山川の場合も、同じところばかり出て、もっと上流の方とかも被害が大きいところがあったのに、そちらにはボランティアが来ないということだったと思います。

そういう中でも、非常に復旧が早かったのは、地域の連携というか、田舎でこそで、近所を助けに行くと。僕も消防団ですずっと出ていました。自分の家がつかったのに、それを抜けて出ていましたので、帰ってから片づけが大変でしたが、軽トラックでみんなが荷物を運ぶというふうなことで、復旧が非常に早かったと思います。

ところが、2年ちょっとたちましたけれども、何か過去のことみたいに、みんな口になくなってしまいました。そのときはみんな大変だったんですけども、人間てすごいなというか、恐ろしいなと思ったのは、その部分です。だから、そういう現場を見る体験――そんなのはしたくないことですけども、皆さんが震災で体験されたことがベースになって、いろいろ考えられると思うんですけども、逆に言うと、災害というのを頭の中で考えるのはもっと意識しにくいことかなと思いました。だから、そういう貴重なデータとか聞き取りなんかをたくさんして、その共有を少しでもした方がいいんじゃないかと。

前の川のサミットでも、そんな話をさせてもらったと思います。

○松本 ありがとうございます。時間が既に5時を回っておりますけれども、もう五、六分だけお時間をいただいて、会場からご質問を幾つかいただいておりますので、時間の関係もあって、テーマにかかわらないことははしよらせていただきますが、新見さんへのご質問で、環境漁協宣言に関連して、こういうことを進めていく上で、行政がどう支えてきてくれたのか、あるいは企業がどのように理解してくれているのかということが1つと、もう1つは、補償金をもらわないという話が先ほどございましたが、それが漁協の内部ですんなりと合意ができたのかということについて、少し補足をしていただければと思います。

○新見 後の補償金の問題からいきますけれども、直接的には矢作川河口堰の問題で補償金の問題が再びクローズアップされてきまして、これは平成10年にほぼ決着がついたんですが、平成10年より前に、矢作川河口堰に漁協はどう対処すべきかという問題が出てきました。矢作川河口堰の交渉というのは、20年間ぐらいやってきたんですね。古い漁協の役員の方々は、大体がいいじゃないか、7つもダムがあるんだから、もう1つできたって大したことないぞということで、補償金はもらおうと。当時、組合員に分けていたので、組合員も期待していたし、漁協の方も、残った金でアユの栽培施設をつくって、天然アユが上ってこなくなっても、そこで飼育したものを放流すればいいじゃないかということできたんです。

議論が高まったのは、ドイツとスイスへヨーロッパの近自然河川工法を見に行ってきたからです。もう1つダムができたって大したことないというのが古い人たちで、新しい人たちは、もう1つが大事だぞ、もう1つつくられたら、本当に終わっちゃうと。しかも、海と川との境じゃないかということになって、当時海の方の漁協が絶対反対で、交渉の席に着いていなくて、川の方は交渉の席に20年間着いてきたんですが、海の方と組むぞ、絶対反対だということで、話がこじれてきた。そのときに、名古屋市が水利権を放棄しまして、漁業団体の方は、環境問題をちゃんとクリアできるという署名をしてくれということを出していましたので、両方相まって中止ということにいったんだらうと思っております。

補償金をもらうかもらわないかというのは、本当は難しい問題なんですけれども、今の現状は私たちが100年間環境を金で切り売りしてきた結果生まれたんだと。漁業団体の側から金をくれというふうに出すことはあり得ぬのですけれども、どうせ負けるならばということで、そこへ追い込まれていくわけですね。それで補償金で解決するというの

が普通になってしまったんだけど、もうだめだと。そんな余裕はないというところで、補償金はもらわないということになって、それ以降、補償金を出してやるぞといった誘いもないわけでありましてけれども、もらわないという方針は確定したものだと思っています。ただ、年次補償というのはあります。年次補償は、今は国の方も民間会社も出しませんけれども、昔から来ているものだけは毎年もらっております。

もう1つは、環境漁協宣言に対する行政のサポートの問題でありますけれども、先ほどもどこかで話題に出ておりましたが、愛知県というところは、兵庫県と違って、そういうことをやることはありませんので、私たちはそういうことは自分でやらないとだれも助けてくれぬという習慣がついておりますので、全部自分でやります。

川のことについても、行政に助けてもらうということは余りなくて、環境団体と一緒にやっていくとか、先ほど蔵治さんの話もちよっとあったんじゃないかと思っておりますが、矢作川は、経済三団体ということをおっしゃっておりますけれども、水力発電、農業用水団体、漁協、これが川で生きていく3つの主要な経済団体で、我々が目指しているのは、三団体がとにかく共存共栄でいくぞと。一番弱い漁業だけいじめるでないぞという話を長年やってきて、ようやくそれが認められて、経済三団体で川の環境問題、主要な問題は解決しようじゃないかと。例えば、魚の問題なんかになると、いろいろな研究団体と一緒にやっていかなければいかぬけれども、主要な問題は経済三団体で解決しようという方針でやりますので、余り助けてもらったことはないです。

○松本 あと、流域連携の理念について各パネリストの皆さんからお聞きしたいというご質問がありますけれども、きょうの話全体を通じて理念の議論ができたということで、時間の関係で割愛させていただきます。淀川水系流域委員会をどのように見ているかというようなご質問もありますけれども、時間の関係で、きょうの直接のテーマにつながらない部分もありますので、またの機会にさせていただきます。ありがとうございました。

あと1つだけ、流域の自治体について、武庫川にも7つの市がありますが、きょうの矢作川のお話を聞いていて、国の直轄河川で、豊田市が矢作川研究所を、三セクになっていますが、バックアップしてやっておられるというのが、大変うらやましく、興味深く聞かせてもらいました。ともすれば、川は国とか県の管理という形になりがちなんですけど、きょうも自治体の方が何人か来ていらっしゃると思いますけれども、どのようにかかわっていったらいいんでしょうか。余り表に出過ぎてもだめだよというご指摘を皆さんからいただいておりますけれども、この辺のことを含めて、最後にこれだけは言っておきたいというこ

とがあれば、一言ずつご発言をお願いしたいんですが。

○蔵治 非常に重要なテーマだと思います。地図を見ますと、武庫川のここより下流の部分では、左岸と右岸で自治体が違うんですね。これはもう大変なこととして、川を洪水あるいは水害を引き起こすものだというふうに見ますと、結局、上流対下流、あるいは左岸対右岸の戦いになるわけです。洪水、水害というのは、上流を犠牲にして下流を守るということもできますし、上流を守れば下流があふれるという関係にあります。左岸、右岸というのも全く同じでして、江戸時代は、例えば左岸側にお城があったら、左岸側の堤防だけ高くして、右岸側はあえて低くするというのをやっていたわけです。つまり、重要なものを優先して守らなければいけないので、あえて優先順位をつけて治水を行うということをやっていたはずです。

そういう洪水リスクの偏りというものをできるだけなくそうとしてきたのが、ここ 100年間の河川行政だったと思います。恐らく尼崎市と西宮市の方は、自分の武庫川の堤防の方が高いんじゃないかという疑いを持ったことのある人は一人もいないんじゃないかと思えますけれども、本当は私はその疑いは持った方がいいと思うんです。河川管理は県任せであるから、県がきっと同じ高さにしてくださっているであろうということをごさん前提にしていっていいと思いますよ。本当に大丈夫でしょうか。

というところから始めていただいて、市町村というか、私たち一人一人のレベルでは、大事なことは治水ではありません。大事なことは、水害を防ぐことです。水害と治水というのは全然違います。そのことをまず記憶しておいていただく。治水というのは、洪水を軽減するためにやることであって、洪水と水害というのは違います。皆さん洪水と聞くと、すごい被害と思うかもしれませんが、川の水がふえることを洪水と呼ぶだけで、洪水から水害にワンステップありまして、治水というのは洪水しかコントロールできません。洪水が水害になるかどうかというところは、何があるかといったら、水防という部分です。仮に水がちょっとぐらにあふれてきても、全く被害がない地域があるはずなんです。それは、一人一人の住んでいる方、あるいはその市町村が、ふだんそういう備えをしていらっしゃるかどうかということにかかっているわけです。

ですので、西宮市と尼崎市で、水防に対する取り組み方に差が出れば、同じ高さの堤防で、同じだけ水があふれたとしても、水害としての被害に格段の差が出るはずなんです。そういうことをきっかけとして、川に関心を持ってもらう市民の方をふやすということが大事で、そういう形での流域連携の進み方というのはあるのかなというのが私の意見です。

○横山 先ほどの続きですが、水害を体験したことから思ったことは、過去何十年間のデータからこれぐらいの頻度で洪水が起こるというのを予想できないような雨がこの10年ほどの間に降っています。去年の7月もそうだったと思います。そういう中で、完全にあふれないということはあり得ないと実感しました。

そんな中で、昔の日本家屋というのは、何回も水害を経験しながら、ダメージを低くするための構造をしていた。羽目板を外して洗えば、畳を戻したらまた住める。そういうふうな知恵が日本にはたくさんあったんじゃないか。それを現在のいろいろな都市、または家屋の構造とかに応用することができるんじゃないか。土地利用についても、昔の人が住んでいたところはわかりませんでした。後から新しい家を建てたところはわかりました。圃場整備をしたところはわかりました。圃場整備をしていないところは、水の流れが、家屋には流れずに水田の方に流れるようになっていました。そういうところをそれこそ今の研究で生かせるんじゃないかと思います。

○新見 矢作川の場合、漁業協同組合の中に森林塾、森林を勉強する塾があります。これは上流の源流の森の整備をお手伝いに行こうという組織として出発したんですけれども、それがうまくいかなくて、みんなは余り賛成してくれなかった。地元の河畔林がめちゃくちゃなのに、それをほうっておいて、上流の山へ我々を連れていこうなんて、組合長はたぼけたんじゃないかというようなことになりまして、結局、上流に行くのをやめて、今河畔林の整備をやっております。

14日にこちらへお邪魔してから、ついこの間、森林塾の塾長さんと酒を飲んだんだけど、武庫川は木が生えとらぬぞと。あの川底では川の中の魚がかわいそうだけれども、あれだけ木がない川というのは人間もかわいそうだなと。今の河川管理の法令でいくと、あそこまで徹底的に木をなくしてしまわぬでもいいじゃないかと。許される範囲内だというふうに思っています。私らは、自然に生えたような格好にして、木をたくさん残して日陰をつくっておりますけれども、やっぱり魚も人間も日陰が欲しいんじゃないかな。

○吉村 今の話は非常に同感で、さっきの写真を見ても、木1本ない、本当に日当たりのいい川をつくっている。それは、どんな工夫をしても川じゃないですよ。木1本植えられるだけのスペースを残すための工夫というのはすごく大事です。足助町の巴川の香嵐渓にぜひ一度行ってください。あそこは、町民の方が植えられたわけですが、あれこそがすばらしい川の原型だと思います。風景も美しいし、たくさんの人たちが川で遊んでいまして、親は木陰で酒を飲んだりしています。いい川とはこういうものだというところを感じ取

る力がないと、いい川は残せないし、いろいろ工夫しましたと言ってもいい川にはならないので、そういうことが大事だと思います。

行政の関係で言うと、総合治水は、一応答申はあるけれども、とにかく総合治水をテーマにした行政の枠組みをやるということですね。県の河川管理者は、治水上はダムをつくらないととても安全にならないというふうに考えたわけですよ。だけど、いろんなことがあって、悩みの中で、治水を何とかしようということで頑張ってきたわけです。安全のために頑張ってきた県は、この次はやっぱり流域の首長との合意、知事が上意下達でもいいと思うんですが――余りよくないかもしれませんが、首長と、総合治水というか、武庫川がもっと安全になるようにいこうという合意がやっぱり必要で、そうでない形で、単なる連絡会議みたいなものやっても、担当者は2年でかわります。そういう枠組みをきちっとつくって、お互いに情報交換したり、すぐ方針にはならないかもしれないですけども、そういうことをスタートしていく必要があるんじゃないか。

鶴見川の場合は、総合治水ということで、協議会ができて、20年ぐらいの歴史があります。総合治水の日というのを6月15日とか決めて、行政も市民も流域自治体も参加して、鶴見川の河川敷でイベントをしたり、幾つかのシンポジウムとか、いろんなことをやっています。

県はここはひとつ頑張って、首長を引っ張り出すということで、そういう責任ある体制、枠組みをつくるというのが大事かと思います。ぜひ応援してあげていただきたいんです。市民は文句は言うんですけども、頑張っているところを見えないせいもあるんですが、応援しないじゃないですか。文句は言うんだけど、応援しないじゃなくて、ぜひここは県の方々に応援して、そういう枠組みをつくっていくというのが大事ではないでしょうか。

○松本 ありがとうございます。大変時間をオーバーして、長時間ありがとうございました。参会者の皆様方も大変ありがとうございました。

きょうの話、大変示唆に富み、私たちはたくさんの方が得られたというふうに思います。とりわけ、私、2点だけ印象的なことを申し上げますと、1つは、しきりに皆さん方から出されたのが、川をしっかり知ること、現場に足を運ぶということ、その中から、その川の価値、いいところを知る。そして、いい川にするにはそれをどうしていったらいいかということで、自分の足元、川の現実を見つめるということなくして川づくりは進まない。

そういう川づくりはまだ始まったばかりなんですけど、まちづくりという観点では、私た

ちは、70年代、80年代以降経験してきて、まちづくりをするには、自分の町のいいところを見つけて、悪いところを直していく。そのためには、町をしっかりと見つめようということから出発するという実績を持っています。それをこれから川づくりに生かしていく。そうでなければ、武庫川づくりのビジョンなどはできっこないのではないかというご指摘をいただいたのは、大変いい収穫ではなかったかと思います。

もう1点は、きょうの話をお聞きしていて私が思い出すのは、これも70年代の初めですからもう30年も前のことですが、川ではなくて、海です。入浜権というのがありました。海が皆埋め立てられてしまって、海を取り戻そうという運動の中で、初めての入浜権大会が高砂で開かれたときに、入浜権宣言というのを採択しようとなりました。そのときに、海は万人のものという表現がありました。結果的には、入浜権宣言は、海は万人のもの、すべての人のものだというふうな宣言になっているんですが、その宣言案に対して会場から異論が出ました。それは何かというと、海は万人のものというのは、海は人間のものだというおごりではないかと。海は人間だけのものではなくて、海にすんでいるあらゆる生き物のものじゃないか。人間もその中の1つにすぎないのではないかという提起が行われました。随分議論がわいたんですが、きょうの話を伺っていると、河畔林の話も出ましたけれども、実は、河畔林が育ち、魚や魚のえさになる小さな生物が川の中に育っているという川づくりでなければ、人間にとっても決していいことではないのではないかと。そういうことを最後に皆さん方からご指摘をいただきました。

私たちは、人間だけに都合のいい川ではなくて、きょうの基調講演にありましたように、自然の中の川としての川をどうつくっていくか、そういう川づくりを心して、そして手を取り合って進めていきたいと思っています。

きょうは本当にありがとうございました。(拍手)

○司会 非常にわかりやすい興味深いお話で、討議もたけなわといったところで、残念ながら会場のリミットとなってしまいました。どうもありがとうございました。(拍手)

討議を拝聴しまして、さまざまな視点の発掘がなされたかと思います。流域委員会として忘れていたことや新しい視点、再認識したこと等々、得ることができました。何か1つでも興味の持てること、印象に残ることがございましたら、本日の収穫として心の中にお持ち帰りください。そして、アンケート用紙がございましたので、まだ記入なさっていない方はぜひとも記入して、出口のところでお渡しくださいますようお願いいたします。

きょうは、川がむすぶ人と地域のすばらしいスタートを切ることができました。きょう

のシンポジウムを糧に、流域の手でつくる新しい川づくりを進めてまいりたいと思います。

先生方、ありがとうございました。そして、会場から参加していただきました皆様、長い時間のおつき合いありがとうございました。これから誇れる武庫川づくりにぜひとも参加していただきますよう、皆様どうぞよろしく願いいたします。

それでは、本日のシンポジウムを終わりたいと思います。